

この素晴らしい世界に銃声を！（旧）

大根の刺身

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

階段で足を滑らせ死んだ高校生、紫藤虎鉄（しどうこてつ）は気がついたら目の前に女神を名乗る女の子がいた。その女神は天国でおじいちゃんのような生活をするか転生して新しい人生を送るか選べと言つてきた。

おじいちゃんのような生活も転生するのも嫌な虎鉄は悩んでいると女神からもう一つの選択肢を与えられて・・・

目 次

プロローグ

首なし騎士 ベルデイア編

この能力でカエル無双を！

この冒險者達とパーティーを！

このネタパーティーに常識を・・・

このリツチーに救済を！

この首なし騎士に敗北を

この勇者（笑）に鉄槌を！（上）

この勇者（笑）に鉄槌を！（下）

この首なし騎士と決着を！

閑話 コテツとちよつとした一幕

機動要塞 デストロイヤー編

この遭難者に祝福を！（上）

この遭難者に祝福を！（下）

この幽霊屋敷で生活を！

この起動要塞に終焉を！（上）

この起動要塞に終焉を！（中）

この起動要塞に終焉を！（下）

この迷子に・・・

この紅魔族の目的を

プロローグ

「紫藤 虎鉄『しどう こてつ』さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。短い人生でしたが、あなたの生は終わってしまったのです」

気がつくと白い部屋の中にいた女の子がそんな事を言つてきた。自分は確かに学校にいたはずなのだが突然の事でなにがなんだかわからない。

「えーと・・・あんた誰?」

俺に向かつて突然訳の分からぬ事を言つていた青い髪の女の子に聞いてみた。

「私の名前はアクア。日本において若くして死んだ人間を導く女神よ！」

「・・・」
どうやら頭をやられているらしい、確かに女神みたいに美人だが、女神は無いだろう

「え？どうしたのあなた？急にかわいそうなものを見る目で私を見て？」

「いや、何でもないです」

「あらそう？じゃ続けるわよ？あなたは学校の階段で足を滑らせて死にました、それはもう頭がザクロみたいになるぐらい盛大に」

「え？」

学校の階段で滑つて死んだ、そう言われるとだんだん思い出してきた。

そう、あれは自習中に寝ていた禿げた担任の頭に油性マジックでお花畑を書いた後だつた。怒つて追いかけてきた担任から逃げ、スヌーグ気分で友人に連絡して遊んでいたとき、塗れてもいい階段で足を滑らせて・・・

「あ・・・」

「思い出したみたいね。そうあなたは何も無いところで何故か足を滑

「らせて死にました」

そう言う女の子・・・アクアの言うようにここは死後の世界で、そしてこのアクアは本物の女神なのかもしない。

「えつと・・・女神さん?自分が死んだ事はわかりましたが、自分はこれからどうなるのですか?」

「女神さんではなくてアクア様つて呼んでくれてもいいけど?・・・さて、あなたには二つの選択肢があります。一つは人間として生まれ変わり、新たな人生を歩か。そしてもう一つは、天国的な所に行くか」おお、天国か転生か選べるのか、それじや天国にしようかな、転生してまた一からやり直すのは面倒だし。それに天国つて言うくらいだから良いことありそう。

「ちなみに天国的な場所はあなた達人間が想像しているような素敵な場所じゃないわよ」

「は?」

「死んだら食べる必要もないし、死んでいるから物も当然生まれない。作ろうにも材料も何もないし。すでに死んだ先人達とひなたぼっこしながら世間話するぐらいしかやる事ないわ」

・・・それ天国じゃ無いだろ、ただの地獄だ。最初は話すこともあるだろうけどその内ネタ無くなつて何もする事無くなるだろ。

「生まれ変わつても今の記憶は勿論無くなるし、そうなつたらそれは今のおなたと言われば違うと言つてもいいし」

「マジですか・・・」

「そもそも嫌だでもどつちかを選ばないといけないし・・・
思つていたら女神さんがこういつてきた。

「うんうん、天国に行くのも生まれ変わることも嫌だよね?そこで!
ちよつといい話があるのよ!」

「ババーン!つと効果音が付きそうな雰囲気で女神さんは続けた。
まあ、要約すると魔王、ぶつころ、頑張れつと言うことらしい。しかも何でも一つ特典を付けてくれるそうだ。」

「あー、面倒ですけどその世界に行きます」

「それじや、選びなさい。たつた一つだけ。あなたに何者にも負けな

い力を授けてあげましょう！」

そうして女神さんは本を渡してきた。この中の物から選べとの事らしい。

しばらく見てみると「武器精製」つとあつた。何でも伝説級の武器や核兵器以外なら現代兵器でも作れるらしい。

「すいません、この〈武器精製〉でお願いします」

「決まつたみたいね、それじゃ、この魔法陣の中央から出ない様に」

「そう言うと足元に光っている魔法陣が現れた。

「紫藤虎鉄さん。あなたをこれから、異世界へと送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には、神々からの贈り物を送りましょう」

女神さんがそう言うと明るい光に包まれた・・・

「あー疲れた・・・つてもう次の人くるの!?」

アクアはそう言い手元の資料を見た。

「な、なにこれ・・・ふ・・・ブーケスクス!!なにこの面白い死に方!?!」

こうして紫藤虎鉄は転移した

首なし騎士 ベルディア編

この能力で力エル無双を！

目を開けるとそこには日本では見ることができないであろう街並みが広がっていた。

「おお・・・これが異世界か・・・」

そんな感想しかできないが、本当に綺麗な街だ。周りを見ると獣耳やエルフみたいな人がいる。

「さて、どうしようか・・・」

ここがよくある異世界物の物語と同じならギルドみたいな所があると思うがこの世界に来たばかりの俺が知っている訳でもなく・・・「とりあえず冒険者っぽいのについて行くかな・・・」

目の前を通った剣を担いでいる男の後に付いて行くとギルドみたいな建物についた。

「いらっしゃいませー！お仕事案内なら奥のカンウターへ、お食事なら空いてる席にどうぞー！」

薄暗い店内には某狩ゲーのギルドみたいに酒場とギルドが併設されているようだつた。

店内にはまだ昼にも関わらず酒を飲んでいるゴツいおっさんたちが騒いでいる。それの横を通り奥のカンウターに向かつた。

「ようこそ！今日はどうなさいましたか？」

そう笑顔で聞いてきた受付嬢にここに来た理由を言つた。

「冒険者に登録との事ですが、登録料がかかりますが大丈夫でしょうか？」

「・・・すいません、お金無いです、すいません」

冒険者として登録料が必要だとは思わなかつた。どうしよう、今は売れる物も無いし金を借りれる知り合いもいない。このまま登録できないとしたら金を稼ぐ事ができない、最悪野垂れ死ぬ・・・

「つ、詰んだ・・・もうダメがあ・・・おしまいだあ・・・」

そう頭を抱え唸つていると、見かねたのか飲んでいた冒険者の一人が金らしき紙を渡してきた。

「おうにいちゃん！ そう落ち込むな！ 登録料は出してやるよ！」

「おおー！ ありがとうござります！」

「いやいや、今日の仕事がうまくいったからな！ このくらい大丈夫さ！」

そう言つて冒険者の男は仲間の所に戻つていった。ああ、何て優しい人がいるんだろうと感激していたら受付嬢が話しかけてきた。

「あ、あのー、よろしいでしようか？」

「あ、すいません！ これで大丈夫ですか？」

さつき貰つた札を渡す。

「はい、千エリスちょうどお預かりします。では冒険者になりたいとの事ですから承知の事でしようが、改めて簡単な説明を。・・・まず冒険者とは街の外のモンスターや人に害を与えるモノの討伐を請け負う人の事です。ですが基本的には何でも屋みたいなものです。冒険者とはそれらを生業とした者の総称の事です。そして冒険者には各職業というものが有ります」

職業、オンラインゲームなどでよくあるジョブみたいものか。

俺は、ゲームでよく戦士系などの前衛職を好んでやつていたが別に遠距離系のジョブが嫌いな訳でもない。どんなジョブでも楽しめればよかつたし、そう言えばあのゲームどうなつたんだろう？

そんな事を考へていると受付嬢が俺の前にカードをさしだした。
まあ、簡単に言うと冒険者カードで倒した敵を自動で記録したり、経験値表示したり、スキルつと言う物を覚える事ができたりする超便利アイテムみたいだ。

カードと一緒に渡してきた書類に記入を渡す。

「はい、結構です。ではこちらのカードに触れてください。それでステータスが分かれますので、ステータスに応じた職業の中からなりたい職業をお選びください、選んだ職業によつて様々な専用スキルを習得できるようになりますのでそこも踏まえてお選びください」

ふむふむ、ステータスによつてなれる職業が変わるのが、自分のス

ステータスがどの程度かわからないがいい職業になれるといいなー

「…はい、ありがとうございます、シドウコテツさんですね、魔力に器用度、敏捷性がとても高いですね!このステータスなら、〈盗賊〉〈アーチャー〉〈冒険者〉などの職業が選択可能ですよ」

見事にサポート系の職業だ、各職業の説明してもらつたが、〈盗賊〉は敵の持ち物をランダムで盗んだり、毒や罠など仕掛けたりするスキルを使え、〈アーチャー〉はその名の通り弓などの飛び道具を使い「狙撃」などのスキルを使える。

〈冒険者〉は基本職で全てのスキルを覚えられるがスキルポイントと言ふものを普通以上に消費するらしい。

「それじゃ、盗賊でお願いします」

何故盗賊にしたかというと、特に理由は無い。ただ目に付いたと言うだけだ。

「盗賊ですね、わかりました。それではあらためて、冒険者ギルドへようこそ!今後の活躍を期待しています」

こうして俺は無事冒険者ギルドに登録できた。

ギルドに登録してから1週間がたつた。この一週間は肉体労働系のクエストをこなして金を貯めた。

その金で短剣を買い、今日初めてモンスター討伐のクエストを受けた。

クエストの内容は「ジャイアントトード5体討伐」このモンスターは比較的簡単に倒せるらしいので受けた。

このクエストで今まですっかり忘れていた特典の能力〈武器精製〉を試して見ることにした。

街をでて、早速武器を出してみる。この能力〈武器精製〉は自分の魔力を消費し、武器を作り出す能力だ。

試しにMGSシリーズお馴染みのハンドガン、「M.K. 22 M.O.d. 0」(パッシュュパピー)を作つてみる。

体から何か抜けるような感じがした後に自分の手にしつかりとパッシュュパピーが握られていた。

「おおー！すげー！」

とりあえず、パッシュュパピーをポーチに入れ討伐の為にスナイパー ライフルでも出そうかと思つたが出せなかつた。どうやら自分のレベルなどによつて出せる物が決まるのかも知れない。

とりあえず、MGS PWでパッシュュパピーとともに初期装備だつた アサルトライフル「M16A1」を精製してみた。今度はちゃんとで きた。

「うん、いいね！」

両手にあるどつしりとした重みに満足しながら歩いていると、今日 のターゲットであるジャイアントトードが出てきた。

「でか！」

思わずそう叫んでしまつた。だがしようがないだろう、なぜならこのカエル人一人くらいなら丸飲みできるぐらいでかいのだ。

「あ、でも動き遅いね、まあいや撃とう」

的がでかいだけ簡単に狙えるので練習にはちょうどいいだろう。

銃を構え狙いを付ける。そして引き金に指をかけて・・・引いた。ダダダダダダ！！！と音を立てながら銃口から飛び出した弾はジャイアントトードに真っ直ぐ飛んでいき、簡単にその体を吹き飛ばした。

「ヒヤーハー！！」

テンションが上がる、この爽快感たまんない。このテンションのまま次の武器を精製。作つた武器はグレネード、それを4匹纏まつていったカエルに投げた。

爆裂音、カエルは纏めて吹き飛んだ。

「ふう・・・終わつたー！」

弾の無くなつたアサルトライフルを手に街に戻ろうとしたとき、突然アサルトライフルが消えた。

どうやら弾切れをしてしばらくリロードしなかつた場合は精製した武器は消えるらしい。

「パッシュュパピーは消えて無いけど実験してみるか」

とりあえず、クエスト完了をギルドに報告しに行きその初クエスト は無事に終わつた。

それからしばらくカエルを狩りまくっていたらギルド内でしばらくカエルハンターなどと呼ばれるよになつた・・・あんたら覚えておけよ・・・

この冒険者達とパーティーを！

力エルを討伐して、3日たつた。その間にわかつた能力の制限などがある。

- 弾切れの銃は10分間リロードしなければ消える

- 弾切れをしていない銃は1日は消えない

- カードリッジなども精製できる

- 刀剣類も精製できるが今のところよくて街で売つてある物と変わらないぐらいのしか精製できない

- 精製した武器は他人に貸す事はできない

- 精製するには大量の魔力が必要。

- 外見のイメージさえできれば武器の仕組みなど理解していくことも精製できる

だいたいこんな感じだ、ちなみにだがしばらくは能力の使用を控えようと思う。

何故かと言うと力エル討伐の後馬小屋に帰つて能力を使用したところ、魔力切れで倒れたからだ、予想以上に〈武器精製〉で消費する魔力は多く、倒れない程度で能力を使用するなら1日3つまでが限界だつた、4つ目は必ず倒れだし、この能力に頼つていたらすぐに死にそうだった。

さて、今は飯を食べるためにギルドの酒場に来ている。今日はクエストを受けるつもりも無いのだが、パーティーの募集を見つつのんびりと過ごごそそうと思っている。

あ、あと盗賊用のスキルも覚えた。覚えたのは〈ステイール〉〈敵感知〉〈潜伏〉〈罠解除〉〈隠蔽〉などのスキルだ。

〈短剣〉スキルも覚えたので最低限の短剣の取り扱いは大丈夫だろう。

それはちょうど飯がきて食べようとした時に聞こえてきた。

それは男女二人組のパーティーでそれだけなら他にもいるのだが、

女の子の方に見覚えがあつた。

「この私がいるのだから、仲間なんて募集をかけねばすぐよ。なにせ、私は最上職のアークプリーストよ？あらゆる回復魔法がつかえるし、補助魔法に毒や麻痺なんかの治癒、蘇生だつてお手の物。どこのパー

ティーも喉から手ができるぐらい欲しいに決まってるじゃない！」

そう言つている女の子はあの時の女神さんそつくりだつた。「力エネルギーの唐揚げもう一つよこしなさいよ」つと言つてゐるその姿は確かにあの女神さんそつくりだが、あの時の威厳がまるでなく、ただのダメ人間に見える。

ジヤージ姿の男は多分俺と同じぐらいだろう、自分の皿から唐揚げを奪つてる女神さんのそつくりさんを、不安気に眺めていた。

「ふーん、あそこパーティー募集するんだ」

面白そうだな・・・明日まだいたら話しかけてみようつと思ひながら力エル討伐の報酬で借りれた宿に帰つた。

翌日、ギルドにいきあのパーティーを探してみたらいた、周りで募集している他のパーテイーがどんどん仲間を増やしていくが2人の所だけには全く人ご来ていなかつた。

少し疑問に思いながら掲示板を見てみると【上級職のみ募集しています】つと書かれたのがあり、察しがついた。
「流石に無理あるだろこれ・・・」

この街・・・アクセルは初心者冒険者が集まる街だ、だから上級職の人はいない訳では無いのだが、数は少なく、いたとしても直ぐに他の街に行つてしまふ。

そんな街で上級職のみの募集はかなり難しいだろう。

「んー、俺も上級職じゃ無いしなあ・・・」

そう、〈盗賊〉はパーテイーに1人欲しいとはいゝ、上級職ではない、それに俺自身も〈武器精製〉つと言う能力は有るがそれはステータスが高くなるわけでも戦いがうまくなるわけでもない。

悩んでもしようがない、話しかけて見るだけ話してみようかな。

^s i d e カズマ

俺は佐藤 和真（さとう かずま）現代日本で死んでこの異世界に転生したのはいいんだが、ついカツとなつて転生特典を俺の死因を笑った女神 アクアにしてしまつたのが運の尽き。この自称女神がとてつもなく使えない、肉体労働をさせれば辛い、キツい、臭いとわめき、モンスター討伐に行けば何もしないで力エルに食われる。一応女神で上級職何だからちよつとは役に立てよ‥‥

そこで新しい仲間を募集しようとしたわけだが、アクアが上級職のみの募集をかけたせいでもまだ誰も来ない。

そろそろ条件でも下げようぜつと言おうとしたときにそいつは來た。

「すいません」

そう声を書けてきた男は俺と同じぐらいだろう、顔は普通でザ・モブ顔つといった感じだ。革の鎧で最低限の部分しか守つていないう、軽装備で腰には短剣がある。

「俺はコテツと申します、上級職では無いけどちよつと興味でたから話だけでもいいですか？」

俺に同意を求めてきた男にいいよつと言おうとしたら‥‥

「なに？ 冷やかしなら他に行つて頂戴！」

「おまつ！ バカ！ なにいつてんだよ！」

この駄目神はやつと仲間になつてくれそな人になにいつてんだ

！ この人帰つてしまふぞ！

ちらつとコテツと名乗つた男を見ると楽しそうに笑いながら「大丈夫、大丈夫」つと言つてきた。

よかつた、これで帰られたらもう誰も来ないかも知れないからな。「座つてもいいかい？」

「ああ、好きに座つてくれ」

そう答えるとありがとうつと言いながら俺の正面に座つた。さて、これからが本番だ。最悪この人だけでも仲間にしないと‥‥

^s i d e o u t

話し合いに持ち込めた所で目の前の男が自己紹介をしてきた。

「俺はカズマだ、そしてこつちが……」

「私はアクアよ！アクシズ教の御神体、女神アクアよ！さあ頭が高いわよ！さあ！私を崇めなさい！」

「えーと、カズマとアクアね。改めて俺はコテツ、職業は盗賊だ。今まで1人だつたんだけどそろそろ仲間が欲しくなつてね。んで面白そうだからここに話しかけて見たつてわけよ」

「あ、あれ？ む、無視しないでよ、崇めなさいよおお」

アクアと名乗つた女神さん似の女の子を無視しながら改めて名乗つた。

「そうだつたんだな、俺は別に構わないぜ、と言うより大歓迎だ！ おお、どうやらパーティーに入れてくれるらしい。助かる、ここなら本当に楽しめそうだつと思つた。」

「ねえー、謝つたら許してくれるう？」

「ん？ あ、すんません、アクアもよろしく」

俺がアクアと握手をしていたらカズマが提案をしてきた。

「それじゃ早速クエストに行かないか？ コテツの力も見てみたいし」「わかった、じゃなににいく？」

俺がそうきくとカズマはクエストはもう受けていると言う事なので飯くつたら出発しようとなり注文をしようとした時だつた。

「上級職の冒険者募集を見て来たのですが、ここで良いのてしようか？」

どことなく氣怠げな、眠そうな赤い瞳。黒い肩口ぐらいまでの髪。そして、典型的な魔法使いの格好をした少女がいた。

「我が名はめぐみん！ アークウェイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法操る者……！」

……この世界には頭のおかしい奴しかいないのかな？

「冷やかしならお帰りを」

「冷やかしちがわい！」

カズマ達の話を聞くとこの娘、紅魔族と言う高い知力と魔力をもつ

民族で、その中でも随一使い手らしい。

しかも爆裂魔法と言う攻撃魔法の中で最高の火力を持つ魔法を使えるらしい。

どうやらこの子も一緒にクエストに行くらしい、最高火力の魔法が使える人がいるのは心強い。めぐみんと自己紹介をちょうど来た飯を食べてクエストに向かった。

このネタパーティーに常識を・・・

「なんこれ？ネタ？」

思わずそう言いたくなる光景が目の前に広がっていた。

自分の目の前には口から足がはみ出して動かないカエルが2匹、少し離れたところにはクレーターができている。

隣には俺と同じくポカンとしてるカズマ。ちなみにこのパーティーの上級職であるアクアとめぐみんは今カエルの口の中でもがいている。

もう一度周りを見てツッコミを入れながら2人を捕食しているカエルに攻撃をしてるカズマの手伝いをしながらもう一度呟いた。

「なにこれ？ネタ？」

こうなつた経緯を振り返ろう。

「では、爆裂魔法を使うのでカエルの足止めをお願いします。爆裂魔法は最強魔法ですのでその分、魔法を使うのに時間がかかるのでお願ひします」

飯を食べ終わつた俺達は平原に来ていた。どうやらカズマ達の受けっていたクエストは俺がよく受けた物と同じみたいだ。

また、ジャイアントトード討伐クエスト、一匹は昨日倒したみたいだ。

「わかつた、遠い力エルを標的にしてくれ、近い方は・・・おい、アクア行くぞ！今度こそリベンジだ！元なんたらのお前もたまにはそこのなんたらの実力を見せてみろよ！」

「元じゃないわ！今もちゃんとした女神よ！」

「わかつたよ！女神（笑）さつさと行くぞ！コテツはもう一匹を頼む。」

「わかつた」

「女神の後ろに（笑）を付けないでよ！何よ！打撃が効き辛いだけのカエルが！見てなさい！今日こそは活躍を！」

そう叫んだアクアは特に何もできずにカエルの体内に侵入した。

何やつてんだろうあいつ。

……つとその時、めぐみんの周りの空気がビリビリと震えだした。自分も能力で使うからわかる。あれ魔力だ。震える空気に思わず足を止めめぐみんの方を見てしまう。

「見ていてください。これが、人類が行える中で最も威力のある攻撃手段。……これこそが、究極の魔法です！」

そうして杖を力エルの方に向けると光が走った。

紅い瞳を輝かせ、目を見開く。

『エクスプロージョン』ツ！

めぐみんの杖から放たれた光は力エルに突き刺さると目も眩む光と轟音と共に、凄まじい爆風が体を襲つた。

煙幕が晴れ、視界がクリアになるとその魔法の凄まじさがわかつた。

力エルのいた場所から20m以上のクレーターやがきていて、力エルは跡形も無くなっていた。

「すげー・・・」

さすが最強の魔法と言うだけある、この一撃で俺の『とつておきの武器』以上の破壊力を持つていた。

少し悔しいが、この力を使うのが味方なのだから心強い！

カズマもその威力に感動していたが、めぐみんの近くに湧いた別の力エルをもう一度倒す用にめぐみんに言おうとしたが、何故かその肝心のめぐみんが倒れていた。

「ふ・・・・・・。我が奥義はその絶大な威力ゆえ、消費魔力もまた絶大。・・・・簡単に言うと限界を超える魔力を使つたので身動き一つ取れません。あ、近くから力エルが沸くなんて予想外です。・・・ヤバいです。食われます。すいません、ちょ、助け・・・ひあつ・・・！」

そして今に至る、回想終了。ちなみに任されていた力エルはめぐみんの魔法に巻き込まれて吹き飛びました。

俺とカズマでアクアとめぐみんが身を挺して動きを封じた力エルにとどめを刺し。このクエストは完了した。

「うつ・・・うぐつ・・・。ぐすつ・・・。生臭いよう・・・」

「カエルつていい感じに温かいんですね・・・。無駄な知識が増えました・・・」

そういう知らない知識を教えてくれているめぐみんは今俺が背負っている。俺も魔力切れで倒れる事は有るが、やはり消費魔力の差だろうか俺より動けない時間が長い。

「今後爆裂魔法は緊急時以外使用禁止だな、これからは別の魔法で頑張つてくれよ、めぐみん」

そう言うカズマ提案に全面的に賛成する、事あるごとに倒れられた迷惑だからね。

しかし、どうしようも無いときは爆裂魔法を使えるのは大きなアドバンテージになるだろう。

そんなことを思いながら歩いていると背中のめぐみんが何か呟いた。

「・・・使えません」

「え？ な、なあめぐみんさんや、つ、使えないって、な、何が・・・？」

俺は思わずそう聞いた。

「・・・私、爆裂魔法以外の魔法は一切使えません」

「・・・マジ？」

「・・・マジです」

どうやらこの紅魔娘はただの単発式の欠陥口マン兵器だったようです・・・

「なあ、爆裂魔法つて上級魔法何だろ？ それを覚えるってことは他の魔法覚えれないって事はないだろ？」

当然の疑問を言うカズマにめぐみんは

「もちろん、他の魔法も使える方が良いのでしよう。だが私は爆裂魔法しか愛せない！」

と言いこのパーティのリーダーをしているカズマの頭を抱えさせた。

俺？ 俺は別に問題ない、何故ならそつちの方が面白そだから、確かにパーティを率いる方からするとたまつたもんじやないだろうが、俺はリーダーではないし、するきもない。

それに今の俺はあまり人のこと言えないし。

それからギルドに戻り、アクアとめぐみんが風呂に入りに行つてる間に報告を済ませた。その時に新人の受付嬢から「コテツさん、またジヤイアントトード狩つてたんですね、さすがカエルハンターさんですう」つと言われ落ち込んだ。

報酬の低さに打ちひしがれているカズマに一旦帰る事を告げ帰つることにした。

俺と入れ替わるように誰かがカズマの方に向かつたが気にしない。

ギルドをでて俺は防具屋に向かつた。アクセルの武器屋や防具屋は頼めばオーダーメイドで武器や防具を作ってくれる。

別に新しく防具を新調するわけではない、ただ武器を精製した際に武器を持ち運びしやすいようにホルスターとスリングベルトを作つて貰つた。

スリングベルトに関しては長さの調節が出来て長い物を持ち運びやすく述べるようにお願いしたら普通に渡された。ホルスターはさすがにわからなかつたみたいだが、簡単に説明して、だいたいの形を書いたら明日までには作つておくつと言わされたのでハツシユパピーを渡していた。

補足すると「武器精製」で作つたものを他人に貸せないと言つていたが使用する事が出来ないだけで、普通に持たせたりする事はできる。

「おう、来たかボウズ！頼まれてたのはできてるぜ」

防具屋はそう言うとホルスターを渡してきた。ベルトと一緒になつている革製のヒップホルスター、そこには昨日渡したハツシユパピーが入つていた。

「ありがとう、助かるよ」

「客の要望に答えてこそその客商売だ、気にするな」

防具屋から受け取り早速腰のベルトと交換する、元々付けていたポーチをホルスターの反対の方に通して付ける。

「うん、いいね！あらためて礼を言うよ」

「いいつてことよ、代金は2万エリスだ、また何か合つたらうちにこいよ！」

金を渡し店をでる、腰巻きをしているからホルスターやポーチは見えない。

「つとそろそろだつたな」

そろそろ防具屋にハツシユパピーを渡して24時間たつ、俺は腰のホルスターに手を当てて魔力を送つた。

一度精製した武器は弾切れした銃を除き、魔力を送れば消えない事がわかっている。

それは一から精製するより使用魔力は大幅に減るためコスパがいい。ちなみにだがハツシユパピーに装填している弾は麻酔弾だ。

カエル討伐の翌日、昼過ぎにカズマ達がいるギルドに向かつた。午前中は買い物をするために別行動だつた。

ギルドにはめぐみんとアクアがいたが、カズマがいない。

「うつす、カズマどうしたの？」

「ああ、コテツですか。おはようございます。カズマは今盗賊スキルを教えて貰いにいつてますよ」

冒険者のカズマは他の人にスキルを教えて貰わないとスキルを覚える事はできない、なのでスキルを教えて貰つてるのはいいんだが……

「盗賊スキルなら俺に言えればいいのに、なにしてんだあいつ？」

「さあ、何も考へてないのでわ」

そんな事を話ながら座りカズマを待つことにする。ちなみにアクアは奥の方で宴会芸スキルをもう一度してくれと言われている。

しばらくするとカズマが戻ってきた。その隣には女騎士風の人と、うなだれた女盗賊がいる。

「あつー・ちよつとカズマ、やつと戻つてきたわね、あんたのおかげでえらい目に……つて、どうしたの、その人？」

人だかりを押しのけながら、カズマの隣にいる人の事をアクアが聞いている。

「うむ。クリスはカズマにぱんつを剥がれた上にあり金をむしり取られて落ち込んだけだ」

その発言にめぐみんとアクラのカズマを見る目が冷ややかな物となつた。

「おいあんた！何口走ってるんだ！待て、間違つてないけど、ちよつと待て！」

カズマが言い訳を言おうとしたとき、落ち込んでいたクリスつと言うらしい子が顔をあげた。

「公の場でぱんつ脱がされたからって、いつまでもめそめそしてもしようがないね！よし、悪いけどダクネス、あたし、稼ぎのいいダンジョン探索に参加してくるよ！ぱんつ人質にあり金とられちやつたしね！」

その会話が聞こえてたらしい他の女性冒険者の方々の目まで冷たい物になり、怯えるカズマにクリスがクスクスと笑い「このくらいの逆襲はさせてよね！それじや、行つてくるからそちら辺で遊んでてね、ダクネス」

そう言いながら、仲間募集掲示板に行つてしまつた。
「えつと、ダクネスさんは行かないの？」

自然と俺達のテーブルに座つたままの人、ダクネスさんは「前衛職だからどこにでも有り余つている」つと答えた。

「そう言えればカズマ、スキルは覚えたのか？」

俺がそう聞くとカズマが不敵に笑つた。

「ふふ、まあ、見てろよ？『ステイール』ツ！」

カズマが叫び、右手をめぐみんに突き出すと、その手にはしつかりと黒い布が握られていた。

「・・・」

「・・・何ですか？レベルが上がつて変態にジョブチェンジしたのですか？・・・あと、スースーするのでぱんつ返してください・・・」

「あ、あれ？お、おかしーな、こんなはずじや・・・」

周りの女性冒険者の視線が冷たいものから生ゴミでも見るかのようなものになつていく中、突然ダクネスさんがテーブルをバンと叩い

た。

怒っているかと思い顔をみるとその目は何故か輝いていた・・・。
「やはり。やはり私の目に狂いは無かつた！こんな幼げな少女の下着
を公衆の面前で剥ぎ取るなんて、なんと言う鬼畜・・・っ！是非・・・
！是非とも私を、このパーティーに入れて欲しい！」

「いらない」

そうカズマがそう即答したのだが、ダクネスは頬を赤らめて、ブルツと身を震わせた。

何だろう、この面白い人どことなくアクアやめぐみんに通じるオーラを感じる。

「ねえカズマ、この人だれ？昨日言つてた面接に来た人？」

「この方、クルセイダーではないですか、断る理由ないのでですか？」

「そうだな、うちには前衛職が少ないからな、俺とカズマでやつてもいいが、どちらかと言うと俺も前衛タイプではないからいてくれたらありがたいのだが・・・」

俺達からそう言われたカズマは眞面目な顔をして俺達にこう言ってきた。

「実はな、ダクネス。俺とアクアは、こう見えて本気で魔王を倒したいと考えている」

マジか、そんな事は聞いていなかつた、どうやらめぐみんも聞いていなかつたみたいで驚いている。

「丁度いい機会だ、コテツとめぐみんも聞いてくれ。俺とアクアはどうあっても魔王を倒したい。そのために俺達は冒険者になつたんだ。という訳で、俺達の冒険は過酷な物になる事だろう。特にダクネス、女騎士のお前なんて、魔王に捕まつたら、とんもない目に逢わされるだろう」

「ああー、全くその通りだ！昔から、魔王にエロい目に逢わされるのは女騎士と相場は決まつてるからな！それだけでも行く価値はある！」

「えつ？・・・あ、あれ！」

とても力強くそう答えたダクネスにカズマは戸惑う。

「め、めぐみんも、相手は魔王。この世で最強の存在に喧嘩を売ろうつてんだよ、俺とアクアは。そんな所に無理して残る必要は……」カズマがすべて言い終わる前にめぐみんは立ち上がり、マントをひるがえしながら。

「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法使いにして、爆裂魔法を操りし者！我を差し置き最強を名乗る輩など、我が魔法で消し飛ばしてみせましょう！」

そう厨二病みたいな事を言うめぐみんにカズマは頭を抱えた。

「ねえ、カズマ……私、カズマの話聞いていたら何だか腰が引けてきたんだけど。なんか、こう楽して魔王討伐できないかな？」

そう言われて、カズマは一番お前がやる気だせよ！つとツツコミをしていました。

・・・・あれ？俺には何もないの？

ちよつと何て言う期待していただけにちよつとがっかりした。

このリツチーに救済を！

カズマの話を聞いて何故か当事者のアクアが一番怖じ氣づいたのにたいしカズマが「お前が一番やる気だせよ・・・」カズマがアクアにそう言つた、その時。

『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険各員は、至急冒険者ギルドに集まつてください！繰り返します。街の中にいる冒険者は至急冒険者ギルドに集まつてください！』

そう街中にアナウンスが響く。

確か、魔法で声を拡大しているんだつたけ？

「おい、緊急クエストってなんだ？モンスターが街に襲撃しにきたのか？」

「ん、多分キャベツの収穫だろう。そろそろ収穫の時期だしな」
めぐみんとダクネスは少し嬉しそうだ、俺はカズマと首を傾げている。

「皆さん、突然のお呼びだしすいません！もうすでに気づいている方もいるとは思いますが、キャベツです！今年もキャベツの収穫時期がやつて参りました！今年のキャベツは出来がよく、一玉の収穫につき、一万エリスです！すでに街中の住民の方は家に避難して頂いております。それでは皆さんできるだけ多くキャベツを捕まえてください！くれぐれも逆襲されないよう、お願い致します！」
・・・・・逆襲？キャベツが？

そう思つていると歓声が外から聞こえてきた、見てみるとわけの分からぬ事が起きていた。

「この世界のキャベツは飛ぶわ。味が濃縮され収穫時期が近づくと逃げ出すわ。簡単に食われてたまるかとばかりに」

緊急クエスト『キャベツを収穫せよ』を無事終え、今は収穫されたキャベツ料理を食べていた。

「うま・・・何でただのキャベツの炒め物がこんなに旨いんだ・・・」

そろそろやくカズマの隣で俺はひたすらキャベツを食べていた。

うまい、街の冒険者を総動員して収穫させるだけはある、そして何とこのキャベツ、新鮮なうちに食べると経験値が貰えるらしい。捕まえただけでも大量の経験値を貰えるし、報酬も高い。いいこと尽くだ。

うちのパーティーの上級職の3人は今回のクエストの働きをほめ合っている。ちなみにカズマは頭を抱えテーブルに突つ伏している。

そうそう、ダクネスが正式にパーティーに加入した。

メンバー構成だけでみればナイト系の上級職クルセイダー、魔法系上級職アークウェイザード、プリースト系上級職アークプリーストつと言ふ豪華なパーティーだが、中身は攻撃が当たらない前衛職、1日一回しか魔法を使えない魔法使い、そして今回のクエストでも全く約にたたなかつた自称女神のプリースト。

俺は楽しいからいいが、実質リーダーのカズマはそうでもないらしい。まあ、気持ちはわからんでもないけど・・・

翌日、カズマとアクアが装備を買いにいくと言うので他のメンバーは自由行動をしている、昼過ぎにたまり場になつてている冒険者ギルドに集合との事なので今は宿の部屋でホルスターと短剣の手入れをしていた。

能力をあまり使わなくしてから短剣をよく使うようになつたので消耗が激しい、そろそろ新しい物に買えようかな？

そんな事を考えていたら気がつくと約束の時間を過ぎていた。

「あ、やべ！」

急いで装備を整え冒険者ギルドに向かつた。

ギルドに付くと既にカズマ達が揃つていた。

「すまん！ 遅れた！」

「遅いですよ、コテツもう次に行くクエスト決まつてますよ」

どうやら俺がつく前に受ける依頼を決めていたらしい。

「悪かったよ、俺はどのクエストでもいいし別に良いんだけどね。それよりカズマ、随分冒険者らしくなつたじゃないか！」

ジャージから主に革製の防具に変わっていた、今までが悪い訳では無いが、ジャージはただの服だ何の防御力も無い、一部に鉄が使われているから金属を嫌うジャイアントトードにたいして有利になるだろう。

「それで？何のクエストにいくんだ？」

「ゾンビメーカーだ、最近よく墓にでるらしいからな」

「ゾンビメーカーってアンデット系のモンスターだつたよな？このパーティーで行けるのか？」

「それは大丈夫だ、ゾンビメーカーは駆け出し冒険者でも倒せるモンスターだからな、油断しなければ絶対に勝てる」

そう胸を張り言うダクネスだが、少し不安だ。そして、俺が不安そういうにしている事に気がついたアクアがおちよくなってきた。

「あれあれ！コテツさんアンデットが怖いの？ブーケスクス!!この私がいるのよ！アンデットモンスターなんていちころよ！」

ついイラッとした俺は〈武器精製〉でハリセンを作り全力でアクアの頭に振り下ろした。

パン!!っと大きい音が鳴り、悲鳴を上げながら転げ回っているアクアとそれを羨ましそうに見てるダクネスを無視して、俺はカズマにいろいろと説明してもらつた。

カズマが言うに一番の役立たずである自称女神のレベルを上げることにより知力アップをはかろうとしているらしい。アーフプリーストであるアクアにはアンデットモンスターは相手をするのが楽で簡単に倒せるつと言うことらしい。めぐみんからハリセンをどこから出したか聞かれたが、適当にごまかした。

街から外れた丘にの上。

そこには、お金の無い人や身寄りの無い人をまとめて埋葬する共同墓地がある。

土葬をするこの世界は死んだらそのまま埋めるだけ、なので墓地にはよく埋められた死体目当てにアンデットモンスターが集まる。その代表的なのがゾンビメーカー、このモンスターは自分は質のいい死

体に取り憑き、配下のゾンビを連れまわすらしい。

その共同墓地近くで俺達は今バーベキューをしていた。日の入りまではまだまだ時間がある。日がでているときはアンデットモンスターは出ないので安心だ。

「ちよつとカズマ、あんた肉ばかり食べてないで、野菜もたべないさいよ！」

「俺、キヤベツ狩りからどうも野菜が苦手なんだよ、焼いてる途中で飛んだり跳ねたりしないか心配になるから」

そう言いながらカズマはマグカップを取り出し、初級魔法でコーヒーを作り飲んでいた。

「わりい、カズマ俺にも水くれ」

「あ、私にもお願ひします」

「わかった、ヘクリエイトウォーターザー！」

カズマが魔法を使うとマグカップに水が注がれる、魔法使い以上に魔法を使いこなしているような気がするが、あえていわないでおこう。

日が沈み、周りの気温が下がってきた。

「冷えてきたわね、ねえカズマ、私ゾンビメーカーなんて雑魚じゃなくて、もっと大物が出てきそうな気がするの」

「・・・おい、そんな事言うなよ、それがフラグになつたらどうするんだよ」

「静かに・・・」

そんな事を話しているカズマ達を注意する、今敵関知スキルに何か引っかかった。

「おいおい、ゾンビメーカーってあんまりゾンビ引き連れないよな？結構な数いるぞ・・・」

「ああ、今俺の方も感知した」

そうカズマと話していると墓場の中央で青白い光が走った。

その幻想的な青い光は大きな魔法陣、そして魔法陣の隣に黒いロープの人影が見えた。

「・・・あれ？・・・ゾンビメーカーじゃ・・・ない気がします・・・」

「突つ込むか？ゾンビメーカーじゃないにしても、こんな時間に墓地にいる以上、アンデットには違いないだろう。ならアーヴプリーストのアクアがいる限り楽勝だろう」

「いや待て、あれほどのゾンビを連れている奴だぞ？下手したら返り討ちにあうぞ。後もう少し待て、後少しくらいのゾンビも罠の範囲に入る……」

俺が全部言い終えないうちにアクアが思いがけない行動をとった。

「あ―――――――っ!!」

突然叫びロープの人影に駆け寄るとビシッと人影を指差し

「リツチーがノコノコこんな所に現れるとは不届きなつ！成敗してやるつ！」

そんなアクアの声を聞き、急いでアクアに言つた。

「アクア！飛べ！吹き飛ばす!!」

俺の鬼気迫る声が聞こえたのか、アクアは慌ててこちらに戻つてきた、リツチーは何が起こっているのか把握

まだ最初の位置にいた。

「よし！」

アクアが効果範囲を出た瞬間にスイッチを押す。

一瞬遅れ爆発音が鳴り響く。C—4俺が墓地に来て仕掛けておいた罠だ、スキル〈罠隠蔽〉で隠された物はそう簡単には見つからない。威力こそめぐみんの爆裂魔法には遠く及ばないがそれでも充分威力は高い。並みのモンスター程度なら一撃だろう。だが……

「な!?」

「うう・・・ひ、酷いですよ、いきなり攻撃してくるなんて・・・」

爆発の中心にいたリツチーは傷一つなかつた。

「だ、ダメですコテツ！リツチーはあらゆる物理攻撃を受け付けません！」

「え！マジかよ!?」

俺が驚いていると、アクアがまた突つ込んで行き魔法陣を壊し始めた。

「や、やめやめ、やめてええええ！誰なの!?いきなり出てきて爆破した。

り私の魔法陣を壊そうとするのは?!やめて!やめてください!」

「うるさい!黙りなさいアンデット!どうせこの怪しげな魔法陣でよ

からぬことを企んでいるのでしょ!?何よこんな物!こんな物!!」

超大物モンスターのはずのリツチーが魔法陣を踏みつけるアクア

の腰に泣きついている。

「やめて!やめてー!!これはまだ成仏できていない子たちを天に返して上げるための物です!」

リツチーが言うように人魂のようなものが青白い光と共に天に消えていってる。

「リツチーの癖に生意氣よ!そんな善行アークプリーストの私がやるわよ!」

そうアクアが言うと片手を上に突き出し。

「〈ターンアンデット〉ツ!」

そうアクアが言うとアクアを中心に白い光が墓場を包んだ。

その光はゾンビ達に触れるや否や、ゾンビ達が消えるように浄化されていった。その光は勿論アンデットであるリツチーにもおよび……「きやー!か、体が消える!止めて止めて、私の体が無くなっちゃう!!成仏しちゃう!」

「あははははは、愚かなるリツチーよ!自然の摂理に反する存在よ!神の意に背くアンデットよ!さあ、私の力で欠片も残さず消滅するがいいわっ!」

「おい、やめてやれ」

そう言いカズマがアクアの頭を剣の鞘で小突くと集中力が切れたのか、白い光を放つのを止めて、頭を抑えて涙目になっていた。そのアクアを無視しカズマはリツチーに声をかけた。

「お、おい、大丈夫か?えっと、リツチーでいいのか?あんた」

「だ、大丈夫です……危ないところを助けて頂き、ありがとうございます。おっしゃる通り、リツチーです。リツチーのウイズと申します」

ウイズと名乗つたリツチーはびっくりするほど美人な人だつた。

何故ウイズがこの墓地で普通は街のプリーストがやるような事を

しているかと言うと、街のプリーストは拝金主義でお金を持つていな
い人が埋葬されるこの墓地は後回しにされ、ろくに供養されないので
天に帰れないでの、定期的に訪れ天に帰りたい魂を天に返してやつて
いるとのことだ。

普通にいい人だった、それはもう、うちの自称女神のアーヴィング
プリーストよりは確実に。

カズマはアクアが定期的にここを訪れ天に返す事を約束し、そのか
わりになるべくこの墓地に来ない事をお願いした。

墓場から帰る途中ダクネスが呟いた。

「そう言えば、ゾンビメーカー討伐はどうなるのだ？」

「「「あつ」」」

クエスト失敗！

この首なし騎士に敗北を

「コテツ、あの時の爆破はどうやつたのですか？」

今、俺達は冒険者ギルドで野菜スティックを食べながら雑談していた。カズマは情報収集してくるつと言い他の冒険者と駄弁っている。何だかんだ言いながらちやんと仲間の為に働くカズマは充分リーダーとしての仕事をしている。

「聞いているのですかコテツ？ 墓場での爆破はどうやつたのですか？」

「いや、だからなめぐみん、企業秘密だつて、ネタバレなんてしたら罠の効果が薄くなるんだつて。な？ わかつてくれよ」

この前、墓場でウイズを爆破してから俺にどうやつたのか気になるらしく、毎日のように聞いてくるようになつた。

最初はカズマ達も一緒に聞いてきたが、しばらくすると諦めたらしく、聞いてこなくなつたがめぐみんは自分の領分が盗られたと思つたようだ。

「めぐみん、あれは爆裂魔法に比べて威力ないし、魔法では無いからゴースト系のモンスターには効果ないし、大型のモンスター相手じや足止め程度しかできないよ、このパーティーには火力が足りない、それを補えるのはめぐみんしかいないんだよ！ そうだよ！ このパーティには容姿端麗、最強無欠のアークウイザードのめぐみんが必要なんだ！」

面倒なのでとりあえず誉めておこう。まあこの中にはいろいろと詳細を付ければ完璧何だが、付けたら爆裂魔法かけられそうだからやめておこう。

「あ、え、ええ！ そうですとも！ このパーティーにはこの私が必要なのです！ コテツはわかつますね！」

ええ、わかつてましたよ、誉めれば調子に乗ることくらいは・・・「ねえねえダクネス、コテツ詐欺師みたいな笑顔浮かべてるよ・・・」「そうだな、めぐみんは浮かれて気づいてないようだ・・・」

おい、そこのアホども詐欺師言うな。俺は嘘は言つていないと、

まあいろいろと言つてない事は有るけど。

そんな事を話していたらカズマが帰ってきた。

「おい、アクアどうした？」

「別にー？ カズマが他のパーティーに入らないか心配シテナイシー」

そう言いながらもアクアは不安そうにカズマを見ている。

「いや、情報収集は冒険者の基本だろ？」

そう言いながら野菜ステイックを食べようとして逃げられるカズマ。

「もう、随分と楽しそうでしたねえカズマ」

めぐみんが机を叩き怯んだ野菜ステイックを食べながら言う。

「何だこの新感覚は・・・・？ カズマがよそのパーティーと仲良くしていふると、胸がもやもやする反面、何か新しい快感が・・・もしやこれが寝取られ・・・」

おかしなことを口走るダクネスに若干あきれつつ、コップを弾いて野菜ステイックを取る、俺もこの流れにのる。

「・・・カズマ、てめえ他のどこ行つたら爆破するからな・・・」

「おい待てコテツお前まで何を行つているんだ!? しかも怖いわ!! 情報交換は当たり前だろうが・・・」

俺がそういう、フェイントを掛けて野菜をとる。皆の野菜をとる行動を見ていたカズマはバンツーと机を叩き野菜ステイックを取ろうとすると普通に避けられた。

「・・・・・・・・・だああああらっしゃああああああ!!!!
やめて！私の野菜ステイックになにをするの!?」

「野菜ステイックごときに舐められてたまるか！ てか何で野菜が逃げるんですよ!!」

「新鮮だからじゃね？ ほら、新鮮のほうがうまいじやん、魚にも活き作りつて有るじやん」

「はあ・・・ そう言えばお前らに聞きたいことがあるんだよ。・・・ お前らのスキルってどんな感じなんだ？」

カズマがそう聞いてきた、まあ仲間のスキルを把握しとくのはいざと言うときに役に立つだろう。

まずはダクネスがスキルを言った。

「私は〈物理耐性〉〈魔法耐性〉それと各種〈状態異常耐性〉でしめて
いるな、あとは〈デコイ〉という凹スキルだけだ」

「〈両手剣〉とは覚える気はないのか？」

「無い、こう……必死に剣を振るが当たらず、力及ばず圧倒されるの
が気持ちいい」

「よし、お前は黙つていろ」

「……んん……っ！ 聞いておいてこの仕打ち……」

ダクネスは頬を赤らめ、ハアハア言つている。そんなダクネスを無
視し次はめぐみんに聞いている。俺はふと思つたことを今だハア
ハア言つているへんたrk……ダクネスに聞いてみる。

「なあ、ダクネス」

「ハアハア……ん？ なんだコテツ……」

「防御固めすぎたらある程度知能のあるモンスターだと諦めて帰るん
じやないの？」

「!？」

「まあ、人のスキル構成に口出しなんて、リーダーじゃない俺がするこ
とじゃないからな、忘れてくれ」

「……何してんだ？ それよりコテツ、お前のスキルも教えてくれな
いか？」

今度は頭を抱えだしたダクネスにアドバイスでもしようと思つた
ところでカズマからスキルを聞かれた。

「ん？ ああ、俺は〈潜伏〉を中心に、基本の〈短剣〉〈窃盗〉〈敵察知〉
〈体術〉の他に〈罠設置〉〈罠解除〉〈罠隠蔽〉〈忍び足〉〈暗殺〉〈破壊
工作〉変わりどころで〈応用体術〉後は最近〈両手剣〉覚えたな……
攻撃のために。後は……まあ、これはいいか」

「最後ら辺なんだか物騒だな……それにしてもいろいろ覚えてるんだ
な」

「まあな、前は一人でやつてたし」

少し〈武器精製〉も言おうと思つたが止めておこう、一応特典だし、
これ頼りにされたらたまたもんじやない。

「あとカズマ、俺のスキルは参考にしないほうがいいぞ」

「え？ なんでだ？」

「対人用スキルが多いからな、体術なんてゴーレムやらにしても意味無いだろ？」

「なるほど・・・だか何で対人用のスキル覚えたんだ？」

「趣味」

「ああ・・・そうか・・・」

何故だろう、俺を見るカズマの目がめぐみん達を見る目になつたんだが・・・

「本当に・・・移籍しようかな・・・」

「「「!?」」」

キヤベツ狩りのクエストが終わつて数日がたつた、あの時の報酬が入りダクネスは鎧の強化を、めぐみんは杖を新調しうつとりとしていた。かくゆう俺も両手剣を買つた、まあ両手剣と言つてもダクネスみたいな大剣ではなく片手剣よりも刀身が長い剣だ。少々値が張つたが『武器精製』で作れるものよりいいものだ。

そんな中、アクアだけは捕まえたキヤベツのほとんどがレタスだったみたいで報酬がかなり少なかつたみたいだ。

その反面カズマの報酬はパーティー最高の100万エリスだった、しかし落ち着ける拠点を確保するために貯めると言う。

「カズマ、俺も住まわせてくれるなら協力するから遠慮なく言つてくれ」

「おう、わかつた」

「カズマ！ 早速討伐に行きましょう！ それも沢山雑魚モンスターが奴です！」

突然めぐみんがそう言い出した。

「賛成だ、早くこの剣使つてみたい」

「そうだな、俺も試したいスキルがあるし」

「お金になるのにしましよう！ ツケ払つたから今日のご飯の分のお金

が無いの！」

「いや、ここは強敵を狙うべきだ！一撃が重くて気持ちいい、凄く強いモンスターを・・・！」

どうやら皆クエストに行くことには賛成なようだ。

「あれ？なんだこれ？依頼がほとんどないぞ・・・」

この前までは依頼が大量に張つてあつた掲示板が今は数えるほどしか依頼が無い、しかも高難易度の物ばかりだ。

ギルドの受付嬢に聞いてみると魔王の幹部が街外れの小城に住み着いた影響で、この待ち付近の弱いモンスターが隠れてしまつたらしい。そのため魔王幹部に怯えない高難易度の依頼しか残つていない。

流石に高難易度のクエストに行くのはまだ無理つとのことなので（約一名残念そうだが）しばらくは暇になつた。文無しのアクアはバイトをし、ダクネスは実家に帰つた。

暇な俺とカズマはめぐみんに連れられ、たまたま見つけた古い城にむけて爆裂魔法を打つのが日課になつていた。

一週間たつた頃、それは突然やつてきた。
『緊急！緊急！全冒険者の皆さんへ直ちに武装し、戦闘態勢で待ちの正門に集まつてください!!』

その放送を聴き急いで正門に向かつた。正門に冒険者が集まり、呆然としている。

デュラハン

人に死の宣告をし、絶望を与えるモンスターだ。

正門に立つ黒い鎧のモンスターは脇に抱えていた首を前に突き出し、話し出した。

「俺は、つい先日、この近くの城に越してきたんだが・・・」

ブルブルと震えだし、叫びだした。

「まままま、毎日毎日毎日毎日つつ!!!お、俺の城に爆裂魔法を打ち込んでくる大馬鹿者は誰だああああああああああ!!!!」

デュラハンはそれはそれはお怒りだった。

「爆裂魔法……？」

「爆裂魔法使える奴って言つたら……」

周りの冒険者は俺とカズマの隣にいるめぐみんの方をみた。

めぐみんは冷や汗を流していた。そしてしばらく経つてため息をつきながら前に出た。

デュラハンと対峙しためぐみんの後ろにカズマ達とついて行く、そして〈潜伏〉スキルと〈忍び足〉を使用しながらいつでも戦闘できるように戦器に手をそえる。

「お前が毎日毎日爆裂魔法を打ち込んでくる大馬鹿者か！喧嘩を売つてくるのなら正々堂々正面から来い！こんな陰湿な嫌がらせしやがつて頭おかしいんじやないのか！」

流石のめぐみんもデュラハンに気圧され怯むが、いつものようにマントを翻し

「我が名はめぐみん。アーヴィザードにして爆裂魔法を操る者……！」

「……めぐみんって何だ、馬鹿にしてるのか？」

「ち、ちがわい！」

いつもの調子を取り戻してきためぐみんは続けて言い放つ。

「私は紅魔族の者にしてこの街随一の魔法使い！あなたは我が作戦に嵌つたのが運の尽きです！」

まあ、確かにこの街のウイザード系職の中で随一のバカではあるな……

「ほう、紅魔の者か……なるほど、どうやらそのいかれた名前は本当だつたようだな……」

「私の名前に文句があるなら聞こうじゃないか」

ヒートアップしていくめぐみんだが、後ろにいる俺達含め、眼中に無いようだ。

「まあいい、俺はこの地に調査に来ただけだ、しばらくあの城に滞在することになるだろうから、もう爆裂魔法は撃つな、わかつたな」

「嫌です、それは私に死ねと言つているようなものです。紅魔族は一

日一回爆裂魔法を撃たないと死ぬんです」

「聞いたこと無いぞそんな事、適当なことを言つてごまかすな！」

「…フツ。余裕ぶつていられるのも今のうちです！こちらには対アンデットのスペシャリストがいるのです！先生お願ひします！」

啖呵を切つためぐみんはアクアに丸投げした。

丸投げされたアクアもノリノリで啖呵をきりデュラハンに魔法を掛けようとするが、それより早く人差し指をめぐみんに向ける。

「汝に死の宣告を！お前は一週間後に死ぬだろう！」

めぐみんに呪いがかかる寸前でダクネスがめぐみんをかばつた。一瞬ダクネスの体が黒く光る。死の宣告、デュラハンが使うスキルで呪われた者は一週間後に死ぬスキルだ。

「ふむ、仲間を庇うとは流石クルセイダーだ、少々予定が狂つたがまあいい・・・紅魔の娘よ、貴様の仲間のクルセイダーは一週間後に死ぬ！お前は自分の仲間が苦しむのを見て、自分の行いを悔いているがいい！」

デュラハンが言つた言葉にめぐみんが青ざめるなか、呪われた当の本人が叫んだ。

「な、なんて事だ！つまり呪いを解いて欲しければ俺の言うことを聞けと言ふことだな！」

「えっ」

ダクネスの言葉を理解していないのかデュラハンは素で答えた。

「く・・・呪いくらいで屈したりしたくないのだが・・・！見ろあの兜の下のいやらしい目を！あれは呪いを解いて欲しければ言うことを聞けど、すさまじいハードコア変体プレイを要求してくるものの目だ！！、私は行きたくない、行きたくないのだが・・・仕方が無い、ぎりぎりまで耐えてくるから邪魔しないでくれ！では、行つてくる」

「ええっ！！」

「やめろ！デュラハンの人困つてる！」

「と、とりあえずこれに懲りたら爆裂魔法を打ち込んでくるのはやめろ！それと紅魔の娘、クルセイダーの呪いを解いて欲しくば、城の俺の部屋にたどり着ければといてやろう！まあ城はアンデットナイト達

がひしめきあつてゐる。ひよっこ冒險者のお前達は果たして俺の部屋までたどり着けるかな？クククク・・・クハハハハツ!!

そういうデュラハンは背を向ける・・・今だつ!!

俺は敏捷性を最大限活用し一気に距離をつめる。

「なに?」

向かつてくる者がいるとは思つてもいなかつたんだろう、デュラハンの一瞬対応が遅れた。大剣を持つ手を払い胴体をつかむ、そして一気に投げ飛ばす!!

前スネークに憧れ友達と練習したなんちやつてCQCだ、普通ならうまくいかないだろう。だが今は〈体術〉と〈応用体術〉のおかげで無理やりそれっぽくしている。

地面に叩きつけられたデュラハンに腰の短剣を抜きうち突き刺すが、キン！と音をたて短剣が折れてしまつた。

「あ・・・ぐえつ!？」

「・・・・・」

起き上がつたデュラハンから蹴飛ばされ吹き飛ばされた。

うわあ・・・変な声でたな・・・つとぼやけていく視界の中で思つてゐると。涙目でめぐみんが駆け寄つてきた、遅れてカズマたちも。おいおい、紅魔族随一の魔法使いが簡単に泣くなよ・・・つと言おうと思つたが急に来た睡魔に抗えずに眠つた。

この勇者（笑）に鉄槌を！（上）

↖ s i d e カズマ ↗

「コテツ！起きてくださいコテツ！」

そうめぐみんがコテツを揺さぶりながら叫ぶ。

「ほう、腰抜けばかりかと思つていたが、それでもなかつたようだな。少々できるようだつたが詰めが甘い、俺がこんな安物の短剣で倒せるとかと思っていたのか？」

そう言うとデュラハンは首のない馬に乗ると最後にめぐみんに向かい言つた。

「紅魔の娘よ！こうなつたのは全て貴様のせいだ！自分の行いを後悔するんだな!!ククク・・・フハハハハッ!!」

めぐみんがその言葉に更に顔を青くすると満足したのかデュラハンはそのまま城に帰つて行つた。

余りにあんまりな展開に、集められた冒険者達は呆然としていた。コテツの傍にいためぐみんが青い顔でわなわなと震え、杖を握り直す。そして、一人で街の外へ出て行こうとする。

「おい、どこ行く気だ。何しようつて言うんだよ」

「こうなつたのは私の責任です。ちょっと城まで行つて直接爆裂魔法をぶち込んで、ダクネスの呪いを解かせてきます」

めぐみん一人で行つたところで、どうにかなるものじゃ無いだろ・・・と言うか。

「俺も行くに決まつてるだろうが。お前一人じや、一回魔法撃つて終わりだろ」

「・・・わかりました。でもアンデットナイトがひしめいているらしいです。となると武器は聞きにくいですね。こんな時こそ私を頼りにしてくださいね」

微かに微笑みながらそう言うめぐみん。そうして俺達が作戦を考えていると。

「『セイクリッド・ブレイクスペル』！」

そんな声が聞こえた。そして、アクアが嬉々として言つてきた。
「この私にかかれれば、デュラハンの呪いの解除なんて楽勝よ！・どう、どう？ 私だつて、たまにはプリーストっぽいでしょ？ コテツにだつて回復魔法をかけたんだから！」

「・・・え？」

どうやら行く必要は無さそうです・・・恥ずかしい・・・

＼s i d e o u t＼

デュラハン襲撃から一週間が過ぎた、ダクネスにかけられた呪いはアクアが解いたらしい。

俺はあの後3時間程度気絶していて、よく知ら無いが・・・
あ、後起きた時にスッゴいカズマとめぐみんに怒られた。それはもう、軽くトラウマになるくらい。

「クエストよ！ キツくてもいいかクエストをうけましょう！」

「えー・・・」

突然アクアがそう言い出した。カズマとめぐみんは不満そうだ。
アクア以外のパーティーメンバーの懷は潤っている、わざわざ高難易度の仕事をしたいとは思わない。

「お、お願ひよおおおおお！ 頑張るから！ 今回は、私、全力で頑張るからああああ！」

「・・・しようがけえなあ・・・。じゃあ良さそうなクエスト見つけて来いよ。悪くなかつたら付いていつてやる」

カズマがそう言うとアクアは掲示板へと駆け出して行つた。その後にカズマが見張りに行つた。

「コテツ、もう傷は大丈夫ですか？」

チビチビとネロイドを飲んでいたらめぐみんからそう聞かれた。

あの時デュラハンに蹴られた時肋骨を折ったのだ、アクアの回復魔法で骨は修復されたがしばらくは脆くなつてから安静にしどけと街の医者から言われていた。自分の防御値の低さに思わず涙した。

「大丈夫だよ、医者からも大丈夫って言われたし。それに毎日アクアに回復魔法かけてもらつてたからな。……あれ？俺アイツに礼として金とられたんだが……」

「そうですか、なら良かつたです……」

「おう、ありがとな」

そう言うとめぐみんはネロイドを飲み始めた。

「・・・」

「・・・」

(き、気まずい！すぐ気まずい・・・会話も続かないし。だ、誰かこの気まずさをぶち壊してくれ！そうだ！ダクネス！)

ちらつとダクネスを見るとニヤニヤしながらこちらを見ていた。(だ、駄目だ、こいつ楽しんでやがる!?か、カズマ、はよ帰つてこい!!)それから10分してやつとカズマがアクアを連れて帰ってきた。どうやらクエストで使うものをギルドから借りるための手続きに時間がかかっていたようだ。

「あれ？どうしだのみんな？早くクエスト行くわよ！」

そう空氣を読まないで言うアクアに今回ばかりは心から感謝した。

アクシズの街から少し離れた場所にある大きな湖。今回の依頼は街の水源の一つのこの湖の浄化だ。今は水が汚染されていてブルーアリゲイターと言ったモンスターが住み着いた。このままでは危険で街の水不足に繋がるつと言うことから湖の浄化依頼が出ていたらしい。

湖が浄化されたら、住み着いたブルーアリゲイターも自然と山に帰つて行くらしい。

「・・・ねえ、本当にやるの？」

そう檻の中に入つたアクアが言つた。

「・・・私、今から売られていく、捕まつた希少モンスターの氣分なんですけど・・・」

これはカズマが考えた作戦らしく、アクアは水に触れただけで水を浄化する変わつた体質らしく、檻をアクアごと湖に沈め、ブルー

リゲイターからの攻撃を守りながら淨化する作戦らしい。

俺達はヤバくなつたら馬で檻を引き上げるしかやることが無いらしい。

「……つ……てつ！……起きろコテツ！」

「つ!？」

どうやら途中で寝てたみたいだ、淨化は終わつたらしいのだが、何故かアクアは檻から出ていなかつた。

「わ、わりい」

「いや、大丈夫だ。なあ、コテツ、めぐみんやダクネスと話し合つたが今回の報酬は全部アクアにやつてもいいか?」

「あ、ああ大丈夫だ。つてか寝てて何もしてないからな、貰う方がおかしいよ」

「悪いな、ありがとう」

そう言つてカズマは泣きじやくるアクアの方にいき。

「ほら淨化終わつたのなら帰るぞ。皆で話し合つたんだが、俺達は今回、報酬はいらないから。報酬の30万、お前が全部もつてけ」

普段いろいろと文句を言う癖に、仲間を大事にしているカズマは俺達の立派なリーダーだ。

カズマの言葉に小さく頷いたアクアは呟いた。

「……まま連れてつて……」

?

「檻の外の世界は怖いからこのまま連れてつて……」

「……俺が寝ているうちに何があつたんだいったい……」

「ドナドナドーナー……」

「お、おいアクア、もう街中だからその歌は止めてくれ、ただ得さえボロボロの檻の中に入つて膝を抱えた女を連れ込んでる時点で、ただえさえ街の住人の注目を集めているんだからな? とりあえずもう安全だからいい加減出てこいよ」

「嫌。この中こそ私の聖域よ。外の世界は怖いからしばらく出たくないな

いわ

どうしても檻の外に出ないアクアにカズマが溜め息を付いた時だつた。

「め、女神様っ!? 女神様じやないですかっ！ 何をしているのですか、そんな所で！」

そう叫んだ男は檻に駆け寄ると鉄格子を曲げて中のアクアに手をさしのべた。

ブルーアリゲイターでも壊せない檻壊すとかどんな筋力値してんだろうこいつ？ つというかアクアの知り合いか？

「おい、私の仲間に馴れ馴れしく触るな。貴様何者だ？ 知り合いにしては、アクアがお前に反応してないのだが？」

今のダクネスは普段とは違ひキリツとしていて、とても頼りになりそうな雰囲気を出している。

男はダクネスを一瞥すると「はあ……」とため息を吐きながら、いかにも、自分は厄介事に巻き込まれたく無いのだけれど仕方がないつと言つた感じだ。・・・・うぜえ。

「ああっ！ 女神！ そうよ、私は女神よ！ それで？ 女神の私にこの状況をどうにかしてほしい訳ね？ しようがないわね！」

カズマがアクアに何か言つたらしくようやく檻からでた。
そしてアクアは男を見て首を傾げる。

「・・・あんた誰？」

どうやら知らないようだ、いや、ただアクアが忘れているだけかも
しない。

男は目を見開き驚いて叫ぶ。

「何言つてるんですか女神様！ 僕です、御剣 韶夜（みつるぎ きょうや）ですよ！ あなたに魔剣グラムを頂いた!!」

「・・・・？」

アクアはまだ首を傾げている。そして、俺は今さら気がついた、アクアはあの時俺をここに送った女神さんでカズマも日本から来たのかもしれない、何で一緒にいるかはわからないけど。そしてこのミツルギと名乗った男も日本から来たのだろう、後ろにはミツルギの

パーティーメンバーと思う女の子がいる。

「ああっ！いたわね、そういうえばそんな人も！ごめんね、すっかり忘れていたわ。だつて結構な数の人送つたし、忘れたつてしまふがないわよね！」

まあ、今仲間やつてる俺の事もたぶん自分が送つたと忘れてるくらいだしねつと心の中で思いながら眺めていると。

「ええっと、お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、日々がんばってますよ。職業はソードマスター。レベルは37まで上がりました。・・・所でアクア様はなぜここに？というか、どうして閉じこめられていたんですか？」

ミツルギはチラチラっとカズマを見ながら言っている。

カズマが何か説明しすると。

「・・・バカな。ありえないそんな事！君は一体何を考えているんですか！女神様をこの世界に引き込んで！しかも今回のクエストではオリに閉じ込めてつけた！？」

いきなり叫びカズマの胸ぐらを掴んだ、さすがにこれはやりすぎだ。

俺は腰にあるハッシュユーパピーをいつでも抜ける用に準備する。

「ちよちよ、ちよつと！？別に私は結構楽しいし、ここに連れてこられたのはもう気にしてないんだけどね？それに魔王を倒せば帰れるんだし！今日のクエストだつて報酬を全部くれるっていうのよ！30万よ30万！」

「・・・アクア様、こんな男にどう丸め込まれたかは知りませんが、今あなたの扱いは不当ですよ。そんな目に逢つて、たつた30万・：？あなたは女神ですよ？それがこんな・・・ちなみに、今はどこに寝泊まりしているんです？」

我慢しないと我慢しないと・・・

「えつと、コテツ以外のみんなと馬小屋で寝泊まりしてるけど・・・」「は？」

ミツルギがカズマを掴む手にさらに力が込められた。

「おい、いい加減その手を放せ。お前はさつきから何なのだ。カズマ

とは初対面のが礼儀知らずにもほどがあるだろう」

いつも物静かなダクネスが怒っている。隣にいためぐみんも詠唱をしている。

ミツルギは手を離すと興味深そうにめぐみんとダクネスを観察する。

「……クルセイダーにアーヴィング・ザード？……それに、随分綺麗な人達だな。君はパーティーメンバーに恵まれているんだね。それなら尚更だよ。君はアクア様やこんな優秀そうな人達を馬小屋で寝泊まりさせて、恥ずかしいと思わないのか？さつきの話じや、就いていり職業も、最弱職の冒険者らしいじゃないか」

ミツルギは同情するかのようにアクア達を見て笑いかけた。

「君達、今まで苦労したみたいだね。これからは、僕と一緒に来るといい。もちろん馬小屋なんかで寝かせないし、高級な装備品も買い揃えて上げよう。というか、パーティの構成的にもバランスが取れていんじゃないか。ソードマスターの僕に、僕の仲間の戦士、そしてクルセイダーのあなた。盗賊の僕の仲間とアーヴィング・ザードのその子にアクア様。まるであつらえたみたいにピッタリなパーティ構成じゃないか！」

当然のごとく俺とカズマが入つてない。アクア達がこそぞ話始めたので俺はミツルギに話しかける。

「おい、あんた」

「なんだよ、部外者は引っ込んでくれないかな！」

新調した短剣を引き抜いて飛びかかるとするのをカズマが必死に止めてくる。

「お、おい！コテツ！気持ちはわかるがやめろ！」

「離せカズマ！この礼儀知らずの糞野郎はボコボコにしないと気が済まん！」

カズマを引き離そうとするがなかなか離れない。そんな事しているとアクアが

「ねえ、カズマ。もうギルドに行こう？私が魔剣あげておいてなんだけど、あの人には関わらない方がいい気がするわ」

「コテツ落ち着いてください。さ、早くギルドに行きましょう」「めぐみんにそう宥められ仕方なくでは有るがこいつ殴るのは止めでおこう。

「えーと。俺の仲間は満場一致であなたのパーティーには行きたく無いみたいで。俺達はクエストの完了報告があるから、これで・・・俺達が通ろうとするとミツルギはカズマの前にから動かない。

「・・・どいてくれます?」

さすがにカズマもイライラしているようだ。

「悪いが、僕に魔剣という力を与えてくれたアクア様を、こんな境遇の中に放つてはおけない。君にはこの世界は救えない。魔王を倒すのはこの僕だ。アクア様は僕と一緒に来た方が絶対にいい。・・・君はこの世界に持つてこられるものとしてアクア様を選んだと言うことだよね?」

「・・・そーだよ」

「なら、僕と勝負を使用じゃないか? アクア様を持つてこられる『者』として指定したんだろ? 僕が勝つたらアクア様を譲ってくれ。君が勝つたら、何でも一つ、言うことを聞こうじゃないか」

「よし乗つた! ジャ行くぞ!」

カズマは予想していたんだろう、ミツルギがいうやいなや剣を抜き飛びかかった。

「えっ!? ちょっと! 待つ! ?」

不意をつかれたミツルギだが、腰の魔剣を抜き受け止めに入るがカズマは剣を寸止めして左手を突き出した。

『『ステイール』ツツツツ!』

そう叫ぶと同時にカズマの手にミツルギの魔剣が握られていた。

「「「はつ?」」

そうカズマ以外の全員が言つた。

呆然としているミツルギにカズマは剣を振り下ろした。

「卑怯者! 卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者ーつ!」

「あんた最低! 最低よ、この卑怯者! 正々堂々と勝負しなさいよ!」

ミツルギの仲間がカズマに文句を言っている。

「おい、お前らのリーダーが仕掛けた勝負だろ？しかもこちらはまだ、駆け出し冒険者。俺から言わせればあんたらがしたのはかつ上げだ、あと俺達の仲間を物扱いして、それで普通にスキル使って勝つたらそれが卑怯者扱いとか馬鹿じやないのか？」

「な、何ですって！？」

「は？ 何か？ 間違つたこといつてますか？ おいカズマはよ行こうや」「お、おう、この魔剣貰つていきますね」

カズマがそう言うと取り巻きの一人がいきり立つ。

「な!? バカ言つてんじゃないわよ！ その魔剣はキヨウヤしか使いこなせないわ。魔剣は持ち主を選ぶ。その剣は、キヨウヤを持ち主と認めたのよ？ あんたには魔剣の加護は効果がないわ！」

「マジで？ 俺に使えないのか？」

「カズマ、本来の力が使えないでも、今お前が使つてる物より良いもんだ。それに使わないのなら売ればいい。つかあんたら邪魔だからさつさと行けよ」

そう警告する。さすがに俺も我慢の限界だ。

「じゃあな。そいつが起きたら、これはお前が持ちかけた勝負だから恨みっこ無しだつて言つといてくれ。じゃ、行くぞ」

そう言つてギルドに向かう俺達にミツルギの仲間が武器を構えた。「ちよつとあんた待ちなさいよっ！」

「キヨウヤの魔剣返して貰うわよ。こんな勝ち方、私達は認めない！」

そう言つてこちらに攻撃をしようとした。時、乾いた音が2回鳴つた。まあ、俺が撃つただけだが。ハッシュ・ピーピーに装填していた弾は麻酔弾、それを頭に撃ち込まれた2人は即座に眠つた。

「・・・・よし」

「よし。じゃねーよ！ だ、大丈夫なのか!? ってかそれ銃だよな!? この人たち死んでないよな!？」

カズマは俺が銃を持っている事に驚いている。ちなみにめぐみん達は何が起こつているのかわかっていない。まあ、そうだろう、この世界に銃はないし、魔法を使つた訳じやないの人に人がいきなり寝たの

だから仕方ないだろう。

「カズマ、大丈夫だ安心しろ・・・たぶん・・・」

「安心できるかあああ!!」

結局眠つたミツルギパーティーはそのまま放置する事になり俺達はようやくギルドに戻れた。

この勇者（笑）に鉄槌を！（下）

「お、帰ったか。虎鉄」

「ん？・・・かどうした？」

「ああ、これで最後になるかも知れないからな、最後に挨拶でもしようと思つてな」

「おいおい笑えないって、あんたもう79だろ？あと俺にCQC教えてた奴がなにいつてんだ」

俺はそういうながら笑う。そんな俺を見てあいつは笑いながら続けた。

「虎鉄、お前とお前の爺さんには世話に成った。ワシにはやらねばならんことがあるのでな」

「おう、わかつた。んでどこに行くんだ？国外は何かドンパチやつてるみたいだから気をつけろよ何しに行くかは知らんけど」

「わかつてている。ただ、因縁を果たしにいくだけだ」

「そうか。まあ、何時でも来いよ。歓迎するぞ？お前が前いつてた息子さんと一緒になら尚更な」

そう言いながら俺はMGSシリーズ二作目 ピースウォーカーをしながら言つた。

それを見てあいつは

「なあ、そいつは面白いか？」

「ん？ああ面白いよ。これ実際にあつたことをベースに作つたらしいし、ビックボスカッコいいし」

「実物はそんなカツコ良くないかも知れないぞ？」

「どう何故か照れくさそうに笑いながら言つてきた。

「？なにいつてんだよ、見た目がどうとかつて訳じやない・・・自分の過去を乗り超えてんのががカツコいいんだよ」

「・・・どうか。じゃ、行つてくる」

「おう、気をつけてなー」

そう呑気に言つた事を後に後悔する事に成つた。

ちょうど死ぬ一年前の出来事だった……

「んあ？」

「やつと起きましたかコテツ」

目が覚めるとめぐみんが俺の顔をのぞき込んでいた。

俺達はあるの後何事も無くギルドに着いた、そこでカズマはどこか用が有るらしく出て行き、クエストの報告はアクア達がやつてくれるということで俺は待っていたが、どうやら途中で寝てたらしい。ちなみに帰る途中で能力の事は話した。

「それで、どうしたのですか？」

「ん？ なにが？」

「いえ、泣いて入るみたいですから……」

「え？」

そう言われ目元を拭うと確かに涙が出ていた。

「本当にどうしたのですか？ コテツらしくないですよ？」

「ああ、ちょっと懐かしい夢見てたみたいだ、心配すんな」

「そうですか……」

「な、なあめぐみん……」

「はい？」

俺が続きを言おうとしたとき。

「な、何でおおおおおっ！」

ギルド内にアクアの声が響いた。

「だから、借りたオリは私が壊したんじゃないっていつていつてるでしょ!? ミツルギって人がオリをねじ曲げたんだってば！ それを、何で私が弁償しなきゃいけないのよ！」

「……」

「何ですかコテツ？」

「……いや、何でもない」

「？」

めぐみんが不思議そうにこちらを見てるが適当に流す、てか恥ずかしい。

アクアが、しょんぼりしながら帰ってきた。いつの間にかカズマも戻つてきていた。

「……今回の報酬、壊した檻のお金を引いて、十万エリスだつて……あのオリ、特別な金属と製法で作られてるから、二十万もするんだつてさ……」

今回は流石にアクアを同情した。ミツルギに関しては流石にとばつちりだ。

「あの男、今度あつたら絶対ゴッドブローラーを食らわせてやるわっ！」アクアが悔しげにわめく中。

「ここにいたのかつ！探したぞ、佐藤和真！」

ギルド内によつてミツルギの声が響いた。ミツルギは俺達のテープルに歩み寄り、バンつとテーブルを叩きつける。

「佐藤和真！君の事は、ある盗賊の女の子に聞いたらすぐに教えてくれたよ。ぱんつ脱がせ魔だつてね。他にも、女の子を粘液まみれにするのが趣味な男だとか、色々な人の噂になつていたよ。鬼畜のカズマだつてね」

「おい待て、誰がそれ広めたの過詳しく」

アクアがゆらりと立ち塞がる。ミツルギはカズマを無視して。

「……アクア様。僕はこの男から魔剣を取り返し、必ず魔王を倒すと誓います。ですから……ですからこの僕とパーティをぐぶえつ？」

「ああつ!? キョウヤ！」

アクアに無言で殴られ吹き飛んだ。

「ちよつとあんたオリ壊したお金払いなさいよ！おかげで私が弁償したことだからね！三十万よ三十万！とつとと払いなさいよつ！」

檻は二十万のハズだつたがちゃつかりしてゐる。

ミツルギは財布から金を出してアクアに渡し渡されたアクアはほくほく顔でメニューを見てゐる。

「あんなやり方でも僕の負けは負けだ。そして何でも言うことを聞くといった手前こんな事を頼むのは虫がいいのは理解しているが魔剣を返してくれ……」

「わかつてるなら諦めろよ」

俺がそう言うとミツルギはこちらを見て言う。

「……君は確かこのパーティーの盗賊だね？君のことは僕の仲間から聞いてるよ、よくも僕の仲間をやつてくれたな」

「知るか、さっさと帰れよ。自称勇者（笑）さんよ。人の仲間を景品みたいにして、乗るカズマもカズマだが、お前は最悪だ、なに？選ばれた勇者？馬鹿じやないのか？それにめぐみん達にも苦労をしてきたみたいだねつとか決め顔でいつて、恥ずかしくないのか？俺なら恥ずかしくて人前に出れなくなるね。しかもカズマを格下と見下して仕掛けた勝負で返り討ちにあつてそれで、カズマが正当に得たものを返せだ？あんたは馬鹿じやないのか？」

「くつ・・・・

ミツルギは悔しそうな顔をしながら言い返してきた。

「あ、あれは正々堂々勝負をしない佐藤和真が悪いんだ！しかも『スティール』なんて卑怯な手を使う方がおかしい」

「いや、それは無いだろ、お前は何もスキル使うなつて言つてなかつたし、そもそも、駆け出し冒険者に勝負売るつてなに？圧倒的レベルの差のあるあんたが駆け出し冒険者に喧嘩売るのはおかしくないのか？」

「うつ・・・・

俺はまだ続ける

「それに俺がお前の仲間倒したのは先にそつちの二人が仕掛けて來たんだからいいだろ？正当防衛だ、その二人は別に怪我した訳ではないのだろう？」

「そ、そ、うだが・・・・

「それじゃいいだろ。んじゃ、お帰りはあちらです」

俺がそう言うとミツルギは慌てながら言つた。

「ま、待つてくれ。確かに僕が悪かつた。……だが頼む！魔剣は返してくれないか？あれは君が持つても役にはたたない物だ。そこの剣よりは切れる。その程度の威力しかでない。……どうだろう？剣が欲しいなら、店で一番いいものを買ってあげもいい……返してくれはないか？」

それを聞いたアクアが言う。

「コテツの言うとおり私を景品にしておいて、負けたら良い剣買つてあげるから魔剣返してつて、虫がいいと思わないの？それとも、私の価値はお店の一番高い剣と同等つていいたいの？無礼者、無礼者！仮にも神様を賭の対象にするつてなに考えてるんで巢か？顔も見たくないのであっちいって。ほら早く、あっちいって！」

アケアカ怒るのは無理もないかも知れない
エリスとつた奴がなにいつてんだろ？

「樂府詩集」

待ってくださいアグア様！別にアグア様を安く見ていたわけではっ！」

「…………？ 何かな？ お嬢ちゃん…………、ん？」

「……まず、この男が既に魔剣を持つていない件について」

めぐみんに言われ気づいたミツルギが

佐藤和真！魔劍は！僕の魔劍はどこへやった！」

ミツルギが泣きながらギルドを飛び出して行つた。もう会わない事を願つてます。

「……一体何だつたのだあいつは。……ところで、先ほどから、ア
クアが女神だとか呼ばれていたが、一体何の話だ？」

ダクネスはアクアに当然の質問をした。カズマがアクアに視線をやると、アクアが頷き真面目な雰囲気をだしながら話しだした。

「今まで黙っておいたけど、あなた達には言つておくわ。……私はア
クア。アクシズ教団が崇拜する、水を司る女神。……そう、私こそ
があの、女神アクアなのよ……！」

「「うと言った夢を見たのか」

「違うわよ！何で二人ともハモつてるのよ！」

その時だった。

『緊急！緊急！全冒険者の皆さんには、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくれ下さい！』

「またかよ・・・？最近緊急の呼び出し多いな」

カズマがそうぼやいていると

『緊急！緊急！全冒険者の皆さんには直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくれ下さい！・・・特に、冒険者サトウカズマさんとの一行は、大至急でお願いします！』

この首なし騎士と決着を！

＼s i d e カズマ＼

俺達は慌てて正門前に駆けつけた。軽装備の俺を先頭に、アクアやめぐみんが到着する。重装備のダクネスは少し遅れている。コテツは何か取りに宿に行つてから来ることだ。

「お、やっぱりな。またあいつか」

多くの駆け出し冒険者が遠巻きに見守る中、街の正門前には奴がいた。

そう、あの魔王の幹部のデュラハンだ。

先に来ていた冒険者達の顔色が悪いのはデュラハンの後ろには先日と違いく多くのモンスターを率いている。

朽ちて、ボロボロになつた鎧を身にまとつた騎士達。

鎧や兜の隙間から腐つた体が見え隠れしている。

デュラハンは俺とめぐみんの姿を見つけると、開口一番叫びを上げた。

「なぜ城に来ないのだ、この人でなしどもがああああああっ!!」

めぐみんを庇う形で前にでて、デュラハンに問い合わせた。

「ええつと・・・なぜ城に来ないってなんで行かなきやいけないんだよ？後、人でなしつてなんだ？もう爆裂魔法を撃ち込んでいないのに、なにをそんなに怒つてるんだよ！」

「爆裂魔法を撃ち込んでいない？撃ち込んでいないだと!?何を抜かすか白々しいつ！そこの頭のおかしい紅魔娘が、あれからも毎日欠かさず通つておるわ！それと城に鉄球が飛び出してくる罠も毎日仕掛けであるがそれもお前たちの仕業だろ！」

「えつ」

俺はそれを聞き、めぐみんを見る。

めぐみんが、ふいと目をそらした。

「・・・お前、行つたのか。もう行くなつて言つたのに、あれからまた行つたのか！」

「ひたたたたた、い、痛いです！違うのです、聞いてくださいカズマ

！今までならば、何もない荒野に魔法を放つだけで我慢出来たのです
が……！城への魔法攻撃の魅力を覚えて以来、大きくて硬いものじゃ
ないと満足できい体に……！」

「もじもじしながら言うな！ 大体お前、魔法撃つたら動けなくなるだろうが！ てことは、一緒に通った馬鹿がいるだろ！ 一体誰と……」

俺の言葉を聞いて
アグアか
ふいつと目を逸らす

卷之三

「わあああああーつ！だつてだつて、あのデュラハンにろくなクエス

くてコテツも一緒に行つてたもの!」

逃げようとするアクアの襟首を掴んでいると、デュラハンが言葉を続けた。

「この俺が真に頭にきているのは何も爆裂魔法の件ではない！貴様らには仲間を助けようという気は無いのか？怨念によりこうしてモンスター化する前は、これでも真っ当な騎士のつもりだった。その俺から言わせれば仲間を庇つて呪いを受けた、騎士の鏡のようなあのクルセイダーを見捨てるなど・・・・！」

デュラハンがそこまで言い掛けたとき。

重い鎧をガチャガチャといわせ、ようやくやつて来たタクネスとコ
テツが俺の隣にそつと立つ。

や、やあ

騎士の鏡と褒められて赤い顔をしたダクネスが、デュラハンに片手を挙げて・・・。

あれえ―――――っ！？

それを見たデユラハンが素つ頓狂な声を上げた。

男のせいでその表情は見られないが多分何て！』と言つた表情をし

「何々？ダクネスが呪いに掛かつて一週間経つのにピンピンしてるから驚いてるの？帰つたあと、あつさり呪い解かれちゃつた事も知らず

に？「一クスクス！うけるんですけど！ちよーうけるんですけど！」

そう笑うアクアを見てプルプルと肩を震わせるデュラハンは俺達を睨みながら言つた。

「…おい貴様。俺がその気になればらこの街の冒険者冒険者を一人残らず・・・くぶほお!?」

デュラハンの台詞の途中で突然銃声がし、デュラハンが吹き飛んだ。

それは俺の隣にいるコテツの方から聞こえた。ちらつと見てみると案の定コテツが銃を構えていた。腰だめに構え一発撃つ事にリードをする。よくわからないが、ゲームでみるショットガンみたいだ。

「お、お前ちよつ、待つ…あぎや!?き、貴様、ちゃんと最後まで…ぐつばあ?!い、言わせ…・・・ぐあ!？」

「止めてやれ！コテツ!!『デュラハンの人かわいそุดろ!』

「ええい！止めるなカズマ！ミツルギ撃退したと思つたらまた面倒な奴が来たんだ！さつさと終わらせたい！つてか何でくるの？キツいよ！勇者（笑）からのボス戦とか聞いてないよ！あんたちよつと時間置いて来いよ！空氣読めよ！」

「コテツ！空氣を読むのはお前だ！デュラハンの人力ツコいいこと言おうとしてたじやん！もうちよつと待つたてもいいじゃないか！」

「知るか!!アクアさん！さつさとやつちやつて!!」

「わかつたわ！コテツ!!『ターンアンデット』！」

アクアが浄化魔法を唱える。

「魔王の幹部が、プリースト対策も無しに戦場に立つとでも思つていいのか？残念だつたな。この俺を筆頭に俺様率いる、このアンデットナイトの軍団は魔王様の加護より神聖魔法に強い抵抗を

ぎやあああああああああー!!!
魔法を受けたデュラハンは光を浴びた部分から黒い煙を吹き上がらせている。

自信たっぷりだったデュラハンは、体のあちこちから黒い煙を立ち上がらせ、身を震わせてふらつきながらも、持ちこたえた。

「ね、ねえカズマ！変よ！効いてないわ！」

いや、効いてるだろ……ぎやーって言つてたし。

「く、ククク……説明は最後まで聞くものだ。この俺ベルデイア。魔王幹部が一人、デュラハンのベルデイアだ！魔王様からの特別な加護を受けたこの鎧とそして俺の力により、そこら辺のプリーストのターンアンデットなど全く効かぬわ！……効かぬのだが……な、なあ、お前本当に駆け出しか？駆け出しが集まる街なのだろう、この街は？」

言いながらデュラハンは手の上の首を傾けた。

首を傾げる仕草だろうか。

「面倒だ。いつそこの街ごと無くしてしまえばいいか……」

○ヤイ○ン並みに理不尽な事を言い出したベルデイアは空いていた右手を高く掲げていた。

「フン、わざわざこの俺が相手をしてやるまでもない。……さあ、お前たち！この連中に、地獄を見せてやれ！」

「あつーあいつアクアの魔法が意外に効いてビビつたんだぜきつと！自分だけ安全な所に逃げて、部下使つて襲うつもりだ！」

「ちちち、違うわ！最初からそのつもりだつたのだ！魔王の幹部がそんなへタrena訳がなかろう！いきなりボスがたたかつてどうする、までは雑魚を片付けてからボスの前にたつ。これが昔からの伝統と……」

『セイクリッド・ターンアンデット』！

「ひああああああああああああ！！」

何か言いかけた。ベルデイアがアクアに魔法をかけられ悲鳴を上げた。

ベルデイアは火でも消すかのように、地面をゴロゴロと転げ回つている。

「いいぞー！！もつとやれ！！」

「コテツ!?さつきからお前キャラ変わりすぎだろ!?」

もう、こいつ誰だ？

アクアは慌てた様子で、

「ど、どうしようカズマ！やつぱりおかしいわ！あいつ！私の魔法がちつともきかないの！」

ひあーって言つてたし、凄く効いている気がするが。

本来のターンアンデットは、一撃でアンデットを消滅させてしまうのだろう。

それが……

「こ、この……っ！セリフはちゃんと言わせるものだ！ええい、もういい！おい、お前ら……！」

ベルディアはあちこちから黒い煙を吹きながらも、ゆらりとたつて、右手を掲げ……。

「街の連中を。……皆殺しにせよ！」

その右手を振り下ろした！つと同じに

『エクスプロージョン』つ！』

ベルディアの背後にいた、アンデットナイトが爆発四散した。

「「……えつ？」」

誰がその言葉を言つたのだろう、もしかしたら俺を含めた全員かも知れない。

「よし！ナイスタイミングだ！めぐみん！」

「い、いえ、私にかかればこの程度の演出など……」

「こいつら……」

〈side out〉

俺とめぐみん意外の冒険者が果然としている。俺はめぐみんをおんぶしながら、こちらを呆然とみているカズマになぜか聞いた。

「ん？どうした？やらないのか？」

「あ、え、いや、お前めぐみんになにさせたんだ？」

何つて見ればわかるだろ

「今思えばベルディアさんに悪いことしたなあーって思つてな、何か手を振り下ろそうとしてたし、後ろで爆発でも起きたらカツコいいだろうなと。ほら、あのデュラハン、シチュエーションとか気にしてたじやん？だから良かれと思つてめぐみんにタイミングよく魔法使つ

て貰つただけだけど・・・何かまずかつた?」

俺がそう言うとカズマは頭を抱えながら

いや、まずくはないけど・・・」

「ならよし！ベルディアさん！これが俺にできる精一杯の謝罪だ！」
「めんな！今回の事は八つ当たりだったから、謝るわー！」

怒つてるようみえる。

「ふふふ、
ふざけるなつ
！」

ハラテノアはそこへ向ひた

「お前馬鹿じゃないのか！謝罪だ！俺の軍団全滅してたるだ！あれた
け格好良くしたのに台無しだ！」

そうだとしたらまたまた申し訳ないことをしてしまつた。

「クソ！もういい！この俺自ら、貴様らの相手をしてやろう！」

ベルディアがこちらへ着くよりも早く。他の冒険者が武器を手に、狙われた俺達を援護するように、ベルディアを遠巻きに囮んでいく。「……ほーう？俺の一番の狙いはそこにある連中なのだが……。」クク、万が一にもこの俺を討ち取る事ができれば、さぞかし大層な報酬が貰えるだろうな。……さあ、一攫千金を夢見る駆け出し冒険者よ。まとめてかかつてくるがいい！」

そう周りの冒険者を挑発する。俺はめぐみんを連れ比較的安全な正門の所に置くと、そのまま戻ろうとするがめぐみんに呼び止められ。

頑張ってくださいねエテツ

卷之三

そう行つて今度こそベルデイアとの戦いに戻つた。

俺が戻るとひどい状況だった。ベルデイアの足元にはベルデイアに切られたであろう冒険者の死体が転がっている。

そして、殺される瞬間を見て、力の差を感じたんだろう。冒険者達は誰一人立ち向かおうとしていなかつた……たつた一人を除いて。「ほう？ 次はお前が俺の相手をするのか？」

冒険者達の前に立ち、自らの大剣を正面に構え、背にカズマ達を庇うダクネスの姿はもはや変態などではない。

「おい、ダクネス、あんたじや攻撃当てるの無理だろ？ 俺もやる。ベルディアさんよ、別に構わんだろ？」

「大丈夫だ、問題ない。それより2人だけで大丈夫なのか？ もつと大勢で来てもいいんだぞ？」

そう、言つて構えるベルディアに対し俺達は駆け出した。「ほう！ 来るのか！ 首なし騎士として、相手が聖騎士とは是非も無し。よし、よううかつ！」

ダクネスが両手で握る大剣をみて、回避の構えを見せていく。そのベルディアに体ごと叩きつけるように大剣を……！

ベルディアの足先数センチほど前の地面に叩きつけた。

「・・・は？」

ベルディアが気の抜けた声を上げる。

そのままダクネスを見ているが、同じような視線で他の冒険者達もダクネスを眺めている。

だが、今はそれでいい。

「おい」

「つ！」

発砲音、ほぼゼロ距離から銃弾を受けて吹き飛ぶベルディア、俺が使つている銃は水平二連ショットガン。その威力は高く、近くで撃てば大人一人吹き飛ばすことは容易だ。

流石のベルディアでもこれは堪えるだろう。

「余所見とは感心しないね、騎士さんよ」

「ふん、やはりお前はそこそこやるみたいだが……それでは俺は倒せん。そしてそこのクルセイダーは何たる期待はずれだ。もういい。・・・さて」

ベルディアはダクネスに對して、剣を一閃させた。

「さて、次はお前の……。……は？」

確実に打ち取つたと、思つたのだろう。

だが、ベルデイアの剣はダクネスの鎧の表面を派手に引っ搔いただけだった。

そのダクネスを呆然と見ているベルデイア。

「何度も言うが、隙をみせすぎてるぞ」

ベルデイアの足元に拳大の物を投げると数秒の間があき爆発した。グレネードだ。

足元で爆発したベルデイアは体制を崩したので、有りつけの弾をぶち込んで一旦距離をとる。

「ああっ!? わ、私の新調した鎧がつ!?」

「何だ貴様は……？俺の剣を受けて、なぜ切れない……？その鎧が相当な業物なのか？……いや、それについても……。先ほどのアークプリーストといい、爆裂魔法を放つアークウイザードといい、お前らは……」

「ダクネス！ お前ならそいつの攻撃に耐えれる！ 攻撃は任せとけ、援護してやる！」

「任せた！ だが、私にもこいつに一太刀浴びせる機会を作ってくれ。頼む！」

カズマの言葉にダクネスがそう返事した。

「おい、カズマ。俺ちょっと切り札ですから、その時間稼ぎもよろしく」

「おう、任せとけ。魔法使いのみなさん!!」

カズマの呼びかけに自分の仕事を思いだした魔法使い達が魔法の準備を始め、他の冒険者達も自分に出来る事がないかと動きだした。俺は後ろに下がり、集中する。

今日はすでに2回〈武器精製〉を使用している。普通なら出来でもあと2回、最近レベルが上がって使用出来る回数も増えたが、今から作る物は他の物より魔力を食う。

イメージするのは圧倒的破壊力、形状は筒。魔力がどんどん無くなっていく。少し足りない、だが生命力を使用し無理やり構成してい

く。

カズマ達が水でベルデイアを攻撃している。どうやら水に弱いらしい。

アクアが何か詠唱し始めた。急がないと嫌な予感がする。ギリギリまで魔力と生命力を使いそれはできた。

「はあはあ・・・カズマ！ど・・・」

『セイクリッド・クリエイト・ウォーターアー』！

俺の声に被れるようにアクアが魔法を唱えた。

アクアが生み出した洪水のような量の水が引くと地面にぐつたりと倒れ込む冒険者と、そして・・・。

「ちよ・・・ちよ・・・つ、何を考えているのだ貴様・・・ば、馬鹿なのか！大馬鹿者なのか貴様は・・・!?」

同じく、ぐつたりとしていたベルデイアが、ヨロヨロしながら、立ち上がりつた。

「今がチャンスよ！この私の凄い活躍であいつがよわってる、この絶好の機会に何とかなさいなカズマ！早くいって。ほら、早く！」

「今度こそ、お前の武器を奪つてやるよ！これでも食らええ！」

「やつてみろ！弱体化したとはい、駆け出し冒険者のステイールごときで俺の武器は盗らせはせぬわ！」

『ステイール』ツツツ！

カズマがステイールを使う。だが、ベルデイアの剣はまだ、ベルデイアの手にあつた。

「ああ・・・」

周囲の冒険者から失望の声が挙がつた。

だが、ベルデイアがカズマに斬撃を放つことはなかつた。

その場の皆が、なにが起こつたか分からず、シンつと静まり返つていると。

「あ、あの・・・」

それはベルデイアの声たつた。

「く、首、返してもらえませんかね・・・？」

カズマの手の中でベルデイアの頭が呟いた。

「・・・・・・」

「おい、お前ら、サッカーしよーぜ！サッカーツてのはなあああ！手を使わずに、足だけでボールを扱う遊びだよおおお!!」

「なああああ！ちよ、おいつ、や、やめ!?」

ベルデイアの頭は今までやられっぱなしの冒険者のおもちゃにされた。

「ひやはははは！これおもしれー！」

「おい、こつちこつち！こつちにもパース！」

「や、やめ！？ちよ、いだだだだ、やめえつ!?」

俺はのそのそつと立ち上がりせつかく精製した武器を捨て。

「俺も入れてくれー!!!」

そういう、冒険者達の中に入つていった。

「パース！パース！」

「おう！いくぞ！」

「痛い痛い！やめろー！！」

カズマたちはベルデイアの体の方で何かしている。

「これはっ！お前に殺された、私が世話になつたあいつらの分だ！何度も斬りつけるつもりはない！まとめて、受け取れえつ！」

そう叫びながらダクネスは大剣を思い切り振り下ろした。

「ぐはつあつ!？」

俺たちの足元でベルデイアの頭がくぐもつた声を上げた。

「アクア、頼む」

「任されたわ！『セイクリッド・ターンアンデット』！」

「ちよ、待つ・・・！ぎやああああ！」

アクアの魔法を受けベルデイアの悲鳴が上がる。
さすがに今度のターンアンデットは効いたみたいでつか、ベルディア首は白い光になつて消えていった。

こうして、魔王の幹部ベルデイアは浄化された。

カズマとダクネス達が何やら騒いでいるなか、俺はめぐみんを拾いにいった。アクアの魔法で溺れかけていたらしいがどうやら無事みたいだ。

めぐみんを背負おうとしたが、無理だ。結局使わなかつたが無駄に強力な武器を使つたのが、ダメだつたらしい。

少し後悔しながら、めぐみんの隣に座る。

「おう、大丈夫か？ めぐみん」

「この状況で大丈夫に見えるのですか？」

めぐみんは爆裂魔法で動けなくなつてゐる時に水で流されたのだ。俺は少し余力があつたが、めぐみんにそんな余裕は無かつたのだろう。なすがままにされたらしい。

「まあ、死ななかつたから良かつたしやないか」

「そうですけど、そうなのですけど！ もうちよつと派手に、目立つちたかつたです」

「それはしやーない、あの時俺の提案にのつて撃つからだろ？」

「そ、そうですけど……」

少し悔しそうなめぐみんの頭をぐしゃぐしゃつと撫でて言う。

「ほら、めぐみんはアンデットナイト全滅させただろ？ あれだけの数を一瞬で蒸発させたんだ。充分目立つてるよ」

「そ、そうですか、ま、まあこの私にかかればその程度普通です」

「そうだな」

そんな事を話しているとカズマ達が來た。

さてと、とりあえず。

「おい！ カズマ！ わりい！ 魔力切れで歩けそうにないから宿まで連れてつてくれ！」

そうカズマに頼み俺達は帰つた。

エピローグ

ベルディア討伐から翌日、俺はギルドで騒いでいた。

魔王の幹部を打ち取つた記念に皆で宴会をしているのだ。

「おう！ あん時のにいちやんが魔王軍幹部相手に良くやつたじやない

か！」

そう言いながら俺の背中を叩く冒険者は俺が初めてこの世界に来たときに金をくれたあの冒険者だ

「いや、どれもこれもおつちやんのおかげだよ！あん時の礼だ！好きなだけ飲め！！」

「おおー！にいちゃん太っ腹！」

ガハハハハと2人で笑っていたら今回の主役がギルドに来た。

「おう、ちょつと行つてくるわ」

「大丈夫だ、こつちは好きなだけ飲ませてもらうからな！」

そう言いカウンターの方にいるカズマの方に行く。

「おーう！カズマ！遅いぞ！さつさと報酬貰つて飲むぞ！めぐみんもはよこい！」

「ちょー！コテツ！酒臭いですよ！」

「待てコテツ、めぐみんには酒はまだ早い」

「ああ、その…サトウカズマさん、ですね？お待ちしておりました」

受付嬢の態度に違和感を感じる。

「…あのですね。実は、カズマさんのパーテイーには特別報酬が出ます」

「え、何で俺達だけが？」

カズマの疑問に見ていた冒険者が答えた。

「おいおいMVP！お前らがいなきや、デュラハンなんて倒せなかつたんだからな！」

カズマが代表して報酬を受け取ることになった。

「えー。サトウカズマさんのパーテイーには、魔王軍幹部ベルデイアを見事討ち取った功績を称えて…ここに、金三億エリスを与えます」

「「「やつ!?」」」

その金額にこのギルドにいた冒険者全員が絶句した。

そして…

「おいおい、三億つてなんだ、奢れよカズマー！」

「宇ひよー！カズマ様、奢つて奢つてー！」

「おいダクネス、めぐみん、コテツ！お前に一つ言つておく事がある！これからは冒険の数が減ると思う！大金が入った手前、危険なく、安全に暮らしたいからな！」

「おい待てっ！強敵と戦えなくなるのはとても困るぞっ！」

「私も困りますよ、私はカズマについていき魔王を倒して最強の魔法使いの称号を得るのです！」

「俺は別に構わないけど・・・」

どんどん盛り上がるギルド内で申しわけなさそうに受付嬢がカズマに一枚の手紙を渡した。

「ええと、ですね。今回、カズマさん一行の・・・その、アクアさんが召喚した大量の水により街の一部の家々が流れ、損壊し、被害がでております・・・」「報酬三億、そして、弁償金額が三億四千万か・・・カズマ。明日は金になる強敵相手のクエストに行こう！」

カズマはそつと目を閉じると何かを決意したみたいだ。

さて、俺も改めて気合いを入れよう、この楽しくて仕方ない世界でいきるために・・・

閑話 コテツとちよつとした一幕

新人受付嬢との一幕

今日のクエストが終わりギルドに報告に来た。今回はカズマ達とは別の依頼を受けていた。

ギルドはいつものように昼にもかかわらず冒険者達が酒盛りをして騒いでいる。

俺は奥にあるカウンターで報告を済ませ、まだクエストが終わっていないだろうカズマ達をいつもの席で待つ。

「あ、すいません。ネロイド一つお願ひします」

「ネロイドですね。少々お待ちください」

通りかかった酒場のバイトに注文をし、今回の成果を確認した。

「うん、これだけあれば大丈夫だろう」

俺がニヤニヤしながら、見ているのは今回の報酬の一つ鉱石だ。リムパームと言うこの鉱石は、特殊な加工をすると、軽くて堅く、そして魔力を溜め込む性質を持ち、魔力タンクになる。

しかし非常に珍しく、今回は依頼人と仲良くなり少々譲つてもらつた。もちろん、それなりのお金はかかったが・・・

それで防具を作つてもらうつもりだ。

その時だった

「あれ? コテツさん? 今日は一人何ですか?」

「ん? ああ、リンか。どうした?」

リンは最近ギルドに入つた新人の受付嬢だ。年齢は俺と同じくらい。働き者でしつかりしているが、良くミスをする。

「今日は休みなんか? 制服じやないみたいだが」

「いえ、先ほど終わつたばかりですよ、それより今日は一人何ですか?」

「まあね、俺が欲しい物あつたから別でクエスト受けたんだよ。それより、何か頼めよ。奢るから」

「え！いいんですか？」

そう言うとリンは笑顔になり椅子に座った。

「何がいい？高い物以外なら大丈夫だぞ」

「あ、それじゃ私もネロイドで」

「おう、すいませーん！ネロイドもう一つ！」

ネロイドをもう一つ頼む。ネロイドとはなんかこう……シユワシユワな飲み物だ。決して炭酸ではないがシユワシユワとしか言いようがないので詳しくは勘弁してほしい。

「それで？今日はどんなクエストに？またカエルですか？」

「いや、違うよ。カエルならカズマ達と行つてる」

「ならどんなクエストですか？」

カエルじやないと言うと心底驚いた表情をし、聞いてくる。…
そう言えばこいつだつたな、カエルハンターって騒ぎやがつたの…
少々嫌なことを思い出しつつ、リムパームを出して見せる。

「採集の護衛だよ。こいつは譲つてもらつた奴だな」

リンはリムパームを見ると驚いて叫んだ。

「りりり、リムパームですか！？そ、それって軽くて堅くそして魔力タンクにもなる。あの万能希少鉱石のリムパームですか！」

「しつ！声が出かい！売つたら結構な値段になるからカズマ達には内緒で手に入れたのに知られたらどうする！」

そう慌ててリンの口を塞ぎ黙らせる。ふう・・・危ない危ない。カズマはともかく、アクアやめぐみんに知られたら完璧に売られる。
いや、報酬もカズマ達が受けた依頼より高いからバレたら何か言われるだろう。

「よ、よしリン、お、俺との約束だ。この事をカズマ達に言わないでくれ・・・頼む！」

「えーどうしようかなー」

俺は頭を下げ頼むが、リンは乗り気じや内容だ。

「本当に頼む！せ、せめてめぐみんとアクアにだけはあいつらは絶対に少し渡せつて山賊張りに言つてくるから！」

「…・・・しようがないですね。わかりました、私は黙つときますよ」

「本当か！ありがとう！恩に着るよ！」

「ええ、ただしもう手遅れかもですけど」

「ん？・・・っ！」

後ろから何か堅いものが押し付けられた・・・いやな予感がする。
俺は恐る恐る後ろを向くと・・・

「コテツ？今日はなぜ一緒にクエスト行かないかと思つていたら・・・
なるほど、そう言うことですか・・・」

「め、めぐみん!?」

「ええ、そうですよ。山賊みたいなめぐみんですよ」

お、落ち着け、こう言うときこそ落ち着くのだ・・・よしつ！

「め、めぐみん。これにはちゃんとした訳がな・・・」

「ほう、高報酬のしかも割と簡単な依頼を独り占めして、しかも女の子
をナンパしてるのに何か訳があると！」

「い、いやナンパはしてないし、何を怒つて・・・」

「だまらっしゃい！」

「はい！すいません！」

俺がめぐみんから説教されているのを見てリンは笑い転げている。
「修羅場だ！リアル修羅場とか始めてみました！楽しいですね！」
「お前黙つてくれない!?」

「コテツ！話聞いているのですか?!」

めぐみんが俺の頭をもち、めぐみんの方を強制的に向かされた
「コテツ、何も依頼の事を黙つていた事に怒つてるのではないのです
よ」

「めぐみん・・・」

「私は・・・」

「ん？」

「い、いえ。何でも無いです！」

最後の方、めぐみんが何を言つてゐるのかわからなかつた。

「めぐみん、俺が悪かつたよ・・・仲間だもんな。おいしい依頼を独り
占めにして本当にごめん。次からは皆誘うよ・・・」

「ええ、頼みますよ・・・」

謝ったのに何故か不服そうなめぐみんと話していると……

「ねえ、コテツさん」

「何？リン？」

リンから話しかけられた。

「……あれ」

「ん？……」

リンが指を指した方にはアクアがいて、リムパームをまじまじと見つめそれを指で弾こうと……

「ちょ、馬鹿！止める！」

「え？ なになに？」

俺が止めるより早くアクアがリムパームを弾いてしまった。

ここで説明しよう。リムパームは別名爆発石と言われ、特殊加工する前はある程度の衝撃を受けるとリムパーム内の魔力が暴走し、威力はそこまでないが爆発するのだ。

ギルド内に響き渡る爆発音。そして目の前で消えていく希少鉱石……

「……」

「ケホケホ。あーびっくりしたわ！ なによこれ！ ん？ コテツどうしたの？ 何かあつたならこの女神の私が直々に相談に乗つてあげるわ！ どう？ 淫く光栄でしょ！ さ、あなたの悩みを聞かせなさいな！」

「あ……」

「あ？」

「あんた最悪だ！ この悪魔めー！！」

「ちよつと！ 私に対して悪魔とはなによ！ あんなのと一緒にしないで！」

「知るかああああ！」

俺はそう言いギルドを飛び出した。

翌日、ギルドに行つた俺に待っていたのは爆発で壊れたテーブルの請求書と爆発テロリストというカエルハンターに続く新しいあだ名だつた。

爆発させたのはアクアだよ！

ちなみに未払いだった酒場の代金はカズマが立て替えてくれてい
た。

機動要塞 デストロイヤー編

この遭難者に祝福を！（上）

気がつくとそこは洞穴の中だった。外は吹雪、装備は短剣と少量の食料。幸い水には困らないが、食べれるモンスターでも出ないと明日には食料が尽きる。

そう、俺は冬の雪山で遭難したのだ。

「・・・・・さむ」

さて、どうしてこんな事になつているか、説明をしよう。

ベルディア討伐からしばらくたち、季節は冬になつた。俺はカズマ達とは別に依頼を受け、雪山に来ていた。

前にアクアが爆破させたりムパームの代用品の鉱石と、少しでも多くの報酬を貰い、ベルディア討伐の時の借金を早く返済するためだ。本当ならめぐみん達に宿を借りる予定だつたのだが、そのための資金はギルドへの弁償に消え、宿は借りれなくなつた。

流石に女子達にこの冬に馬小屋で寝泊まりさせるわけにもいかず、俺の借りていた部屋に放り込み、俺はカズマと馬小屋で寝泊まりしていた。

そんなわけで、早く宿に入りたい俺とカズマは話し合い、カズマ達は借金の返済と、冬を越す資金の調達をしに、俺は最低もう一部屋借りる為に一撃熊の討伐に來ていた。一撃熊はその名の通り当たれば一撃で死ねる攻撃をしてくる熊だ。

だが、俺には強化した〈潜伏〉スキルと敵に見つかっていない時の攻撃に大幅なプラス補正を追加する〈暗殺〉スキルがある。

〈暗殺〉スキルの本来の使用法は気配を消す〈潜伏〉スキルの上位スキルに該当する姿を消す〈ハイド〉を使用して相手を強襲する必殺スキルの威力を上げる為によく使われる。

「おし、いたな・・・」

〈潜伏〉スキルで身を隠し、スコープの中から熊を発見した。

今使用しているのはM1C、大口径の自動スナイパーライフル命中

精度はそれほど高くはないが連射ができるが、今回使うのはこれではない。

俺は新しく武器を精製する。ベルディアの時は魔力が足りなく、倒れるぐらい魔力を消費したが、今はそうでもない。

体から魔力が抜けた感覚がする。そして、この手にその武器が出現する。

「よし」

カールグスタフM2、携帯型無反動砲。リロードに少々時間がかかるが砲弾の初速が早く命中精度も高い、威力も最高と言えるほどある。

「ふう・・・・」

深呼吸をし、カールグスタフのスコープを覗く。

「おうおう、呑気にあくびしてるな」

あくびをしている一撃熊の頭をスコープの中心におくもう一度深呼吸をし、スキルを発動させる。

もう一度説明しておくと「暗殺」スキルは敵から見つかっていないときの攻撃全てを底上げする。

買だらうが剣による斬撃だらうが、例え能力で作ったこの武器でもだ。

「ふう・・・・ツ！」

引き金を引く、発射音がし、弾は一撃熊の頭に命中し、爆発した。雪山に轟音が鳴り響き、頭を吹き飛ばされた一撃熊は力尽きる。

「おし！」

俺は一撃熊に駆け寄り素早く解体、肉を少々取る。

「おし、鉱石は先にとつておいたし帰るか」

その時、ゴゴゴゴツ！ つと言う音が聞こえた。さてここで問題、雪山でかなりの威力のある武器、もしくは轟音をだしたらどうなるか、答えは・・・

「雪崩ですねはい！」

そんな事を叫びながら走り出す。ヤバいこうなることを忘れてた。

「うおおおおお！」

叫びながら本気で走るが後ろにはもう雪崩がそこまできて……

「あ、死んだわ」

そう呟いた途端、俺は雪崩に飲み込まれた。そうだ、何とか死ななかつた俺は洞穴を見つけて、助かつた荷物の中の寝袋で寝て……

「クソ！全部俺のせいじゃないか!!」

全部思い出し頭を抱えて叫んでしまった。ヤバい、本当にヤバい、このまま吹雪が止まなかつたら外にすら出れない、仮に出れたとしても、どこかわからない以上、ここにいる方が安全だ。

「……ひとまず、寝るか」

無駄に騒いで体力を消費するわけにはいかず、とりあえず寝ることにした……早く助けが来ることを祈つて……

【遭難生活一日目】

雪山で、遭難した。

助けが来ることを祈り待つ事にする。もしも何かあつたときのために荷物に入つていた、このノートに日記を書くとしよう。

今は雪崩に巻き込まれて、約一日が立つたぐらいだろう、正確な日にちはわからない、そもそもどのくらい寝てたかすらわからないのだから……

まあいい、今日は自讚していた食料を食べた。腹一杯食べる事はせず、少しづつ食べるようしよう。

こここの洞穴にはアンデットモンスターが少しいたが、ボコホゴにして、埋めておいた。潔く成仏してほしいものだ……

【遭難生活二日目】

遭難してから二日たつた、雪崩があつたことはギルドは把握しているだろう。だが、冷静に考えたらギルドは冒険者の為に捜索隊を組むことはないと思う。軽く絶望した。

今日はもう寝よう……

【遭難生活三日目】

ヤバい、食料が切れた。幸い周りには水が大量にある、まだ死にはしないだろう。せめてあの時剥ぎ取つた一撃熊の肉があればなあ……

【遭難生活四日目】

運がいい、今日は吹雪がやんだから少し周りを探索したら俺の残りの荷物を見つけた、両手剣は無かつたが一撃熊の肉はある。これでまたしばらく持つだろう。

【遭難生活五日目】

カズマ達はどうしているのだろうか？ちゃんと借金は返したのか？そもそもこのまま、誰も助けに来なかつたらどうなるんだろうな……いや、誰も助けに来なかつたら死ぬだろう。どうせ死ぬなら最後にあいつに会いたいな……

【遭難生活六日目】

ヤバい、眠い、寒い。

もう体力的に限界だ、食料は無いわけでは無いが体が冷えて仕方がない、今日はもう寝よう。いやどうせ誰も助けに来ないんだ。いろいろと楽しかったが、まだ未練がある……こりや死んだらアンデットになるだろうなあ……そしたらアクアに怒鳴られながら淨化されるのが目に見える。

日記ももういいや、そろそろ鉛筆の芯が無くなる。

・・・あの人ならこんな時にはどうするのだろう、いや、サバイバルの天才なんだ、普通に生還するだろうな。

俺はあの人憧れるだけで、何もしていらない。あの人は自分の信念を突き通した、恩師を殺し、時には味方をも騙し裏切り、それでも自分の信じた物を掴み取るため、戦い。最後は息子に看取られて逝つた。たく、あれだけ言つたのに死ぬなんて……あの後息子さんが会いに来たときはびっくりしたわ、そつくりだったもの。

もういい、この世界で楽しく行きたかったが、もうダメみたいだ、あんたにもう一回あえるかな？あえるといいな。それより、やっぱりいつも・・・一言言いたかつた・・・

↖side カズマ

最近、コテツをみない。三日前に別々で依頼を受けたつきりだ。
その日は死んだりして、いろいろ大変だつたが、直ぐに帰つてくる
だろうと思っていたが、遅すぎる。

めぐみんもそわそわして落ち着かないし、少し心配だ。
「カズマ、コテツを探しに行きませんか？いくら何でも三日も連絡な
いのはおかしいです」

めぐみんがそう言つてきた。そうだな、あいつも俺達の仲間だ。
「おし、ダクネス、アクア。雪山までコテツを探しに行くがいいな？」
「勿論だ、仲間が大変なのだ。助けに行かなくて何がクルセイダーだ」
「しようがないわね！コテツのやつ！見つけたらスッカラカンになる
まで奢らせてやるわ！」

どうやら、ダクネスもアクアもなんだかんだでコテツを仲間だと
思つて いるのか。

「よし、早速準備を……」

「あのお……」

俺が言いかけた時に、声をかけられた。

そつちの方を見てみるとコテツと仲がよかつたリンつという受付
嬢が何故か涙を流しながら話しかけてきた。

「ど、どうしたんですか？」

「さ、さとう……グスツ……かずま……ズビツ様ですね……」

「は、はい。そうですけど……」

リンさんはカウンターの方を指差して

「ウウウ……少々……連絡事項が……ありますので……お越し
ください……」

そう言うとリンさんはトボトボと受付まで戻つていき、他の受付嬢
に慰められていた。

「カズマ、また何かやつとのですか？まったく、しようがないですね
」
「そうだと、カズマ。セクハラなら私にやれ」

「いや、何もやつてないし、多分借金の事だろう、行くぞ」

俺は皆を連れてカウンターまで行くと、リンさんではない受付嬢が

出てきて説明を始めた。

「すいません、リンは少々席を外さました。ここからは私がご説明させていただきます」

「ええ、お願ひします」

「それではまずこちらをご覧ください」

「そう言い、受付嬢はどこかで見たことのある一本の剣を取り出した。

「こちらは先日雪崩が起った雪山で発見された、両手剣ですが、サトウカズマさんのパーティーのシドウコテツさんの持ち物で間違ないでしようか？」

「え、ええ。多分間違いないです」

「そうですか……雪崩が起る数時間前にシドウコテツさんが雪山に入るのを見かけている人がいまして……」

「状況から見て、シドウコテツさんは雪崩に巻き込まれて行方不明、もしくは……」

「やめろ、やめてくれ、続きを言わないでくれ……」

「……死亡したと思われます」

「そう受付嬢は機械的に、淡々と言つた。

「う、うそ……ですよね……」、コテツが……し、死ぬわけ……い、イヤー——!!」

「め、めぐみん！落ち着いて！か、カズマ。めぐみんが！めぐみんが！！」

錯乱するめぐみんをアクアがなだめる、ダクネスは下唇を噛んでグッと何かを我慢している。

「アクア、とりあえずめぐみんを連れて宿に戻れ。俺とダクネスは話を聞くから」

「ええ、わかつたわ。さつめぐみん行きましょう」

「い、いや！コテツ!!コテツ!!」

アクアがめぐみんを連れてギルドを出だのを確認し、改めて受付嬢に話を聞く。

そして、聞けば聞くほどコテツが生きているのが絶望的だとわかつた。

「・・・ギルドで捜索隊とかでないんですか？」

「でません。ギルドでは捜索隊はだしません、冒険者一人一人にそんな事をしていたらきりがありませんので」

「・・・そうですか」

わかつてた事だ、だが納得できない。こんな危険な仕事をしているんだ。仲間が死ぬ事もあるだろう、実際につい最近俺は首を跳ねられ死んでいるのだから。

「それでは、こちらの剣はどうしますか？引き取られますか？」

「ええ・・・引き取ります・・・」

「それでは、こちらにご記入を」

渡された書類にサインしていき、コテツの両手剣を受け取る。ずつしりしたその剣を持つと我慢していた何かが溢れてくる。

「・・・ちくしょう・・・ちくしょう」

「カズマ、今は遠慮せずに泣くといい。我慢するな」

「なにいつてるんだよ・・・自分は泣いてないじやないかよ」

そう言いダクネスの顔を見ると・・・

「ツ!？」

泣いていた、普段は物静かで趣味以外は感情をあまり表に出さないダクネスが泣いていた。

「私だつて辛い。だが私は泣かない、皆が辛いときは私は、私だけは泣くものか。コテツはそう簡単に死にはしない。私達がコテツを信じなくてはどうするのだ。遺体が見つかってないのだ、だとしたらコテツは絶対に生きている。そう・・・信じてる・・・」

「・・・おい、目から何かでてるぞ」

「これはさつき飲んでいたネロイドだ」

「そうか、俺も・・・信じてる。コテツは生きているってな」

「そう言い、ダクネスを見るとダクネスは微笑んだ。

「さて、まずはめぐみんを落ち着かせて、準備をしよう。ダクネス、できれば人手が欲しい、集めてくれないか？」

「任せろ、めぐみんを頼んだぞ」

「おう

そう言い、俺たちは別れた。

待つてろコテツ、今助けに行くからな

この遭難者に祝福を！（下）

オス、おらコテツ！遭難してから七日目に入つたぞ！ん？元気そ
だなつて？まあね、食いもんには今の所困つてないし、ピンピンして
ますよ。

え？日記はどういうことだつて？ああ、あんなもん適当に雰囲気出
して暇つぶしで書いたよ！でもね、ヤバいのは変わらないんですよ。
つてか、さつきから俺は誰と喋つてるんだ？

まあいい、ともかくだな、そろそろ本格的にヤバくなりそうだから、
どうにか近くの街にたどり着ける用に頑張つてみる。

俺はハツシュパピーを精製し、荷物を背負い。洞穴をでる。

ハツシュパピーには前回を反省しサイレンサーを付けている。
〈敵閨知〉スキルと〈潜伏〉スキルを使いながら進む・・・

少し進とそいつはいた。
犬や狼のような体、鋭い牙に爪。そしてゴブリンと思うモンスター
を追い回すモンスター。

その名を初心者殺し。

「つ!?

運が悪い、こんな所で初心者殺しと鉢合わせになるなんて。
幸いまだこちらには気づいていないようだし、引き返すか。

そして、俺が後ろに下がろうとしたとき、敵閨知に何か引っかかる、
それは熊のようなモンスター。そう、俺が遭難するきっかけになつた
一撃熊だ・・・

「なつ!?

驚いて足元の注意がおろそかになつり。パキッ！と枝が折れる音
が響く。そして、こちらに気づく二匹・・・

「クソ！」

そう叫びながら、距離が近い初心者殺しに乱射しながら一気に降り
ていく。だが初心者殺しはどんどんと距離を詰めていき。そして、そ
の鋭利な爪を俺の首に・・・

「ぎやあああつ!?」

そこで目が覚めた。あたりを見渡す。あの時の洞穴だ。

「なんだよ・・・夢か・・・」

俺は安堵するとともに変わらないこの状況に頭を抱える。
本当になにも変わらない、外は相変わらずの吹雪で、誰もいない、俺だけだ。

いや状況は前より悪いだろう、一撃熊の肉は底をつきかけている。
夢でみた初心者殺しと一撃熊の本当の夢の共演、もし現実になつたら本当に絶望しかない。本当に起こる可能性はかなり低い、ほぼゼロと言つていいだろう。

だが、実際に起くるんじやないか? っと考えてしまう。

俺は晴れたときに拾つた薪に火をつけ肉を焼きながら思う。

「ギルドの飯が食いたい・・・」

遭難してそろそろ一週間、もうだめだろう。俺は肉を食い終え、寝袋に入り、眠つた。

↖side カズマ↖

コテツが遭難してから四日たつた、俺達はコテツが遭難したと思われる雪山に来ていた。

俺達のパーティーの他に、コテツと仲のいい冒険者パーティーと防具屋の店主まで捜索を手伝つてくれる事になった。

「皆! 今回は集まつてくれて感謝してる! 絶対にコテツを見つけましょう! そして、心配させたあいつの顔に一発ぶち込もう!」

「「おー!!」

それぞれのパーティー別で探す事になつた、店主はこちらのパーティに入つて貰つた。

「よろしくな、この時期はここいらは特に凶暴なモンスターがでるからな、注意していこう」

「ええ、わかりました。敵闘知は任せください」

そう話俺達は山を上つていく、しばらくしたところで敵闘知に数体のモンスターが引つかかつた。

「ちよつと待て、モンスターだ。数は・・・3体だな」

「よし、ここは私が前に出て・・・」

「おいこら待て」

何も考えずに突っ込もうとした、ダクネスを止める

「店主さん、何かわかりますか?」

「待つてろ、今〈千里眼〉スキル使う」

そして、何を見たのか店主は慌てて言う。

「坊主!すぐに〈潜伏〉スキルを使え!スノウグリフオンだ!」

店主の言葉で俺は直ぐに〈潜伏〉スキルを使い、突っ込もうとする
ダクネスを押さえ隠れる。

アクアとめぐみんはおとなしく隠れている。

スノウグリフオン、通常のグリフオンとは違い、寒い地域に生息するグリフオン、性格は比較的大人しいが、この冬の時期は普通のグリフオンより狂暴になる。何故かというと子育ての時期だからだ。スノウグリフオンの子供は成体に比べかなり弱い。それこそそこの雑魚モンスターに倒されるぐらいには。

だからこそ、スノウグリフオンは冬の天敵が少ない時期に子を産み、育てる。

そのスノウグリフオンがいる子連れのようだ・・・

「気をつけろよ・・・見つかったらコテツを探すどころじゃないからな」

「わかつたか、ダクネス」

「う・・・そうだな、今日はコテツを探しに来ていたんだつたな」

それから俺達はスノウグリフオンが去っていくの一時間ほど待ち、
捜索を再開した。

それからしばらく探したが見つからない。

辺りが少し暗くなり、風が出てきた。

「今日はこの辺にしておこう、吹雪が来そうだ」

「す、少し!あと少しだけお願ひします!」

今日は切り上げようと言う店主にめぐみんは言つた。だが、店

主・・・ラドさんはきつぱりと言つた。

「ダメだ、下手すると俺達まで遭難するぞ!」

「そ、それでも！」

「おい、めぐみん！気持ちはわかるが落ち着け、とりあえず今日は戻るぞ、もしかしたら向こうのパーティーが何か見つけてるかも知れない」

俺達とは別のパーティー・・・コテツが世話になつたと言つていた人達だ。

アクセルの冒険者の中ではそこそこ有名なパーティーだ。

俺がそう言うとめぐみんはしぶしぶだが了承し、俺達は一度山を降りた。

途中で冒険者パーティーと合流し、一度ギルドに戻る。

「こつちは何も見つからなかつたですが、そちらはどうでしたか？」

俺はそう聞くと冒険者・・・ガーズさんが答える。

「こつちは多分当たりだろう、少しだが人が歩いたような跡があつた、アンデットの可能性も無いわけでは無いが、アンデットが昼に外をうろつく可能性は低い、今夜の吹雪で跡が消えるだろうが場所は抑えてる、明日はそこらを重点的に探そうと思う」

「自分達も行きますか？」

「そうだな、そうしてくれると助かる。何せ森の奥で見つけたからな。コテツが目を覚ました所があそこなら迷うのもわかる。必ず、自分達がどこから来たかわかるようにしとけよ。木にしるしをつけれるでも何でもいいから」

「ええ、わかりました。それじゃ、今日は解散と言うことで」

俺がそう言うとガーズさん達のパーティーは帰つていった。

「ラドさん、今日はありがとうございます。また明日もよろしくお願ひします」

「おう、任せとけ」

ラドさんもギルドを出て行つた。

「さて、俺達も今日は解散だな」

それから、コテツ捜索は難航していた、吹雪が続いたからだ、たまに止んだとしても直ぐにまた吹雪がやつてくる、コテツ捜索の範囲を

ガーズさん達が言つていた場所に狭め行つたが、流石に時間が足りない。

「今日は駄目だな、明日にしよう」

「そうだな、坊主たち今日は諦めな」

ガーズさんとラドさんがそう言い帰つていく。

今日も吹雪だ、俺でもわかるが今日行くのは自殺行為だ。

「・・・」

「待てめぐみん、どこに行くつもりだ」

無言で出て行こうとするめぐみんをダクネスが止める。

そのダクネスを見てめぐみんは

「いえ、ギルドにご飯を食べに行くだけです」

明らかに嘘だ、それをわかっているダクネスは退こうとしない。
「あれ？ そうなのめぐみん？ ジヤ私もいくわ！ おなか減つてもう倒れ
そうなのよー」

「「・・・はあ」」

「あ、あれ！ 皆が冷たい目で見てくるんですけど！ 私何か言つた？
ちょっとカズマ何とかしなさいよ！」

こいつは・・・

「わかつたよ、アクア飯にいくぞ」

「さつすがカズマさん！ わかつてる！」

「へいへい、ダクネス、めぐみんお前たちはどうする？」

「私も行こう、もちろんカズマの奢りだよな？」

「いや、奢らねーよ!?」

それを見ためぐみんはブルブルと肩を震わせ

「カズマ達はのんきですね！ コテツが遭難して、もう一週間ですよ！

も、もしかしたらもう・・・コテツは・・・」

そう言い泣き出るめぐみんにアクアは言う。

「何言つてるのめぐみん？ コテツがそう簡単に死ぬわけ無いじゃない
！ あの子どこかのカズマさんと違つてヒキニートじゃないのよ、ちや
んとできる子なの、だから大丈夫よ！」

「おいちよつと待とうか！」

「それにねめぐみん」

俺を無視しながらアクアは続ける。

「私達が信じないで誰がコテツを信じるのよ。どこかの先生も言つてたじやない。諦めたらそこで試合終了だよつて」

「そうだな、コテツの事だ。今にでも帰つてくれ……」

ダクネスが言い終わる前に宿のドアがバンッ！と開いた。

「ふう……やつと帰つてこれたわーきつかつた」

そこには髪を蓄えた今遭難してゐるはずのコテツがいる

「あれ？お前らどうした？」

「こ、こいつわ……人がせつかく心配してゐたのに……
「ん？お、おいめぐみん!?痛い！痛いから杖で殴らないで!?か、カズマ
！た、助け!?」

「お前は一生そこで殴られてろ」

「え、ちょ！か、カズマさん!?痛い！カズマさん助けて！お願ひ！30
0エリスあげるから！」

そう言うコテツを無視して、俺はアクアとダクネスを連れてギルドに行こうとするが、宿を出たところで

「ちょ！めぐみん!?そ、それは洒落にならん！やめて!?また、借金が増える！だから爆裂魔法だけはやめてー!!!」

そう聞こえ、俺はめぐみんを止めるために走りつた。

これ以上、借金を増やさないために……

↖s i d e o u t↖

どうも、さつきまでめぐみんに殴られていたコテツです、あの後力ズマがめぐみんを止めに来てくれなかつたら宿諸共粉々になつてたコテツです。

さて、今はギルドで飯を食べながらカズマやらド、ガーズにいろいろと聞かれています。

そうそう、一撃熊の討伐報告に行つたらリンに悲鳴を上げられ、まるで幽霊を見るような目で見られたら後、思いつ切り叩かれました。

さて、何故遭難したはずの俺があつさり帰つてこれたかと言ふと、簡単です。

俺は一週間ほど雪山で採掘した鉱石に魔力を溜め込んでました、ほらよく寝てると思いませんでしたか？あれは魔力の使いすぎで寝てるんじやなくて氣絶してただけ何ですよ。

そして、何もないところにまで行き、それまで貯めた魔力を使用し〈武器精製〉である乗り物を精製しました。

『ウォーカーギア』俺の世界で昔使われてた兵器、人が乗れる二足歩行兵器では初の物で自由に装備を変えられ、何故現在も使われていないのかわからないほど強い兵器だ。

ウォーカーギアは歩行モードとドライブモードの2つあり、移動速度はもちろん普通に歩くより早く、歩行モードならスリップする事もない。

そして何より、ウォーカーギアに搭載してあるレーダーで辺りを索敵、そして反応が有った所を避けながら進み、しばらくたつたところで森を抜けれた。

そこからは普通に帰つて来れたという訳だ。

「つと言う」と何だ。いや一流石に死ぬと思ったね、運が良かつたよ！・・・ん？どうしたみん・・・ヘブツ！」

無言でカズマに殴られた。

「おーし！皆！このクズに一発ずつかましていこうぜ！」

「「おー！」」

「ちょ、ま、まて！待つて！悪かつた！悪かつたから・・・グフウ！？アギヤ！？」

「おし、コテツ、歯を食いしばれよ」

そう青筋を立てたラドが拳をならしながらよつてくる。

「ま、待て！お前のは洒落にならん！？お、落ち着け！いや！た、助け！：！ブベラツ！？」

「おし、これで勘弁してやる」

「あ・・・あざす・・・」

そう言うとラドとガーズ一行は席を立ち、帰つていった。

「おい、コテツ」

カズマから呼ばれ倒れた状態から顔だけ上げて、カズマの方を見る。

「俺達も帰るからめぐみんよろしくな
え？」

カズマはそう言うとアクアとダクネスを連れ帰った。

ギルドには俺とめぐみんが残りひとつと何とも言えない雰囲気が…

「ど、とりあえず、外でるか」

コクリと頷いためぐみんを連れ外にでる。そして、街の外の平原に来て、二人で星を眺めた。

「・・・・・」

沈黙が俺達を包む、前みたいな気まずさは今は無い。

「コテツ」

「どうした？」

「・・・いえ、何でも」

そう言うめぐみんは星を見てる。俺も星を見ながらめぐみんに言つた。

「なあ、めぐみん」

「何ですか、コテツ」

「俺は親父やお袋の顔を憶えてないんだ、小さい頃からじいさんと暮らしててな、そのじいさんもだいぶ前に死んだけど。まあそのじいさんの知り合いによく目をかけてくれた奴がいてな。まだじいさんが生きてた時に一度だけそいつに連れられて場所は覚えてないけどこうやつて星を見たことがあるんだよ」

めぐみんは黙つて俺の話を聞いている。

「綺麗だった、俺はあの時見た星空は一生忘れないと思う」

「・・・・」

でもなつと俺は続ける。

「今日のこの空も多分一生忘れない、例え死んだとしてもこの事を忘

れるぐらいなら俺は何も無いところで暮らしていくよ。そしてその事を先人の人に延々と自慢してやる」

「迷惑ですね」

めぐみんは笑いながらそう言う

「おう、迷惑と思われてもいい。それぐらい構わないと思えるよ。今は」

「……そうですか。でも死ぬのはやめてくださいね」

「約束はできないけど、まあ善処するよ」

「頼みますよ」

「おう」

俺は立ち上がり懐からある物を取り出し近くの茂みに投げた。

「うわ！なによこれ!?臭い！臭い！」

「ちょ！アクア！バレる・・・ぞ・・・」

「カズマ！声が大きいわいか！」

「ダクネスお前の方がでかいぞ！」

そこでこちらを向いた馬鹿者に聞いた

「なあ、土の中が過ごしやすいか。試してみる気はないか？」

「お、おいコテツ。こ、これはアクアが言い出した事で・・・」

「ちょ、ちょつとカズマ!?私のせいにしないでくれる!?」

「はあはあ、コテツ。私は決して期待している訳ではないぞ！ベ、別に想像して興奮してる訳でわ・・・」

若干一名変な奴がいるが放つておく。

俺はじりじりと近づき・・・

「はあ・・・おい」

「お、おう」

「今日は世話をなつたし、俺は許す」

そう言つて俺は街の方に歩きながら続ける

『俺は』だけど

「ん？え、ちょめぐみん!?やめ!？」

『エクスプロージョン』！」

後ろで何か爆発したが気にしない。

「おし、めぐみん帰るか」

「え、ええ・・・あの・・・おんぶお願ひします」

「はいよ」

俺はめぐみんを背負い宿まで送った、途中で門番さんに怒られたけど・・・

こうして、俺の遭難騒ぎは終わつた

「あ、あいつら本当に置いていきやがつた・・・」

「わ、悪くない！悪くないぞー！！」

「・・・」

この幽霊屋敷で生活を！

「いやーこれまでお世話をなりました」

「いえいえ、良いのよコテツちゃん。また何かあつたらうちにきなさい、歓迎するわよ」

遭難してから数日、俺はほとんど寝ていた。別に怠けていたわけではない、風邪を引いただけだ。

俺が風邪を引いている間にカズマはいい依頼を受けてきた。

「それでコテツちゃん。これからどこで寝泊まりするの？」

「仲間と暮らすんですよ女将さん。うちのリーダーが屋敷付の依頼受けてきたから皆でそこに住むことになったんです」

「そうなの？ よかつたじやない」

そう、カズマが何処からか豪邸付の依頼を受けてきた。達成条件は屋敷に集まる悪霊の浄化、うちのパーティーにはアーフプリーストのアクアがいるし、クルセダーのダクネスはスキルを取れば簡単な聖魔法を使えるはずだ。

俺は本格的な物は使えないが悪霊程度なら短剣や両手剣に魔力を流せば倒せない事もない・・・1体に何分かかるかわからんが・・・カズマもやろうと思えばできるだろうが最初から魔力を通す為に作られた魔剣や聖剣などの特殊な剣と違い無理やり魔力を武器に通すため、結構な量の魔力を消費するので、カズマにはあまり向かない。

「コテツちゃん？」

「おおと、女将さんすいません」

「いいのよコテツちゃん。あ、そうだ！ これ持つて行きなさい」

そう言うと女将さんは厨房から紙袋を持ってきて渡してきた。

「はい、これサンドイッチよ。沢山あるから皆で分けて食べてね」

「ありがとうございます！ それじゃ、待たせているのでそろそろ行きます」

女将さんに別れをいい、俺は宿をると教えて貰っていた場所に向かつた。

街の郊外にある一件の屋敷、普通の一軒家の数倍はある屋敷。ところる貴族の別荘だつたらしいこの屋敷が手放し、売りに出そうとしたところ悪霊騒ぎがおき、買い手がつかなかつたらしい。

一度定着した評判はなかなか拭うことはできない、その事に困った不動産屋がウイズに相談しようとしたところ、たまたま居合せた力ズマとアクアが依頼を受けたのだ。

「待たせたな力ズマ」

「ああ、コテツか」

「んで、除霊はどんな感じだ？」

「進展なし、と言うかそもそも昼に悪霊ができるわけないだろ」

「それもそうか。あ、これ俺の泊まつてた宿の女将さんからだ」

「お、マジで。ありがたいな」

「それじや、俺は荷物置いてくる」

「おー部屋割りはしてたからなー」

「おけーありがとう」

俺は荷物を持ち割り振られた部屋に行き荷物の整理を始めた。

深夜、俺は屋敷の中を歩いていた。別に何も目的が無く歩き回つている訳ではない、ちゃんと仕事をしている。

アクアやダクネスのようにちゃんとした浄化魔法なんて使えないが、教会から聖水貰つてきたからまあ大丈夫だろう。

だいたい屋敷を一周したときだつた、特に何も起こらないからそろそろ寝ようかと考えていたら

「なああああああああああああああああ!!!!」

突然力ズマの叫び声が聞こえた。

「アクア！アクア様あああああ！」

アクアを呼んでいるつと言ふことは悪霊にでも会つたのだろう、聖水すら持つていないうだろう力ズマは霊体の相手はできないしアクアに助けを求めに行くのは当然の事だろう。

俺はアクアの部屋に向かつているとそれを見た、アクアの部屋のドアにガツガツとぶつかる西洋人形を・・・

俺は気がつくと走り出し西洋人形を蹴り飛ばしアクリアの部屋に入つた、中にはカズマとなぜかいるめぐみんそして・・・ベランダにびつしりと張り付いた木量の人形と目があつた。

俺達は叫びながら部屋から走つて出て行つた。

「ううつ・・・一人ともいますか？離れないでくださいよ？」

「大丈夫 いるよ」

「もし人形が出ても置いていいかないから早くしてくれ」
部屋から逃げた俺達は近くのトイレにいた。カズア

トイレしたくて起きていたらしい。

「と詰うかなにあれ？全部悪靈かよ？」

「まああるにはあるけど、あの量には無いのと同じだろ」

「そうだな」

俺達が話しているとめぐみんが言う。

・・・あの、ユーティにカズマ。流石に
ぬの音で歌でも歌つてくれません?一

「いやめぐみんさんや、気持ちはわか

かもトイレの前で歌えとはキツいよ・・・」

也有るだろ!

そう言いながらもカズマはアカペラで歌い始めた。

そして、それを聞いて今まで少し思っていた事が確信に近づいてき
感ジゴ
ン。

「……ふう。えっと、もういいですよカズマ。聞いたことも無い随分

変わった歌ですね？前から思っていたのですがカズマやコテツってどこの国出身なんですか？」

「トイレの前で歌う風習のある日本って言う素敵な国だよ。ほら行くぞ。とつととアクア探して合流しようぜ」

「トイレの前で歌うのはカズマだけだけどな、まあいいか、ほいカズマお前も聖水持つてろ」

俺が持つていた聖水を半分渡して、俺とカズマが前を歩きながら進む。

その後ろをめぐみんがペタペタっと付いて来るが俺のシャツを摘まむのはやめてほしい、恥ずかしくてたまらん。

つとその時だつた。

俺達がトイレの手洗い場から廊下にでようとすると・・・。

カターカターカター

嫌な音が聞こえ、俺達は手洗い場のドアの前に身をかがめた。

人形マジ怖い・・・が俺は別の意味で震えている。何故ならめぐみんが俺のシャツをギュッと掴み、震えながら身を寄せて来たからだ。

普段は格好良く見せようと/orするめぐみんが今は体を小さくして震えている、その姿を見てしまった。

(あ、可愛い)

俺は柄にもなくそんな事を思つたがそれも一瞬で吹き飛んだ。

「つて、おい！めぐみんやめろ！」この屋敷ごと吹き飛ばす氣かつ！しかも手が俺の方向いてるよ！」

めぐみんは恐怖のあまり爆裂魔法の詠唱を始めていた。

慌ててめぐみんの口を塞ぎ暴れないように抱きしめて落ち着かせる。

「落ち着け、いやマジで・・・よし大丈夫か？」

「え、ええ・・・」

顔を真っ赤にして頷くめぐみんをカズマの方に連れて行き俺は真剣な顔でカズマに言う。

「カズマ、お前ドア開けたらめぐみん連れて走れ！俺は時間稼ぐ。なに心配するな聖水まくだけまいて最悪爆破して逃げてるからな死ぬ事は無いだろう！」

頷くカズマにめぐみんを任せ、聖水の入った瓶を投げれるように持つ。

「つらあ！かかるこいやー全員灰にしてやらああああああ！」

叫びながらドアを蹴り開けると、ごつ！ つと言う音鳴ったが気にせず瓶を投げる。

「アクア！ お、 おいアクア大丈夫か！？ ・・・ つめた!?」

駆け抜けようとしたカズマ達が唖然としているのでよく見てみると、ドアの前に顔を押さえてうずくまるアクアと頭から聖水を被ったダクネスがいた・・・

「ふう、これでよし、と。結構いたわねー。結局朝までかかっちゃったじゃないの」

アクアが最後の悪霊を浄化し、明るくなつてきた窓の外を見て言った。

流石にアーチプリースト、大量の悪霊を一晩で退治してしまった。「ふむ、一応ギルドに報告した方がいいだろう。クエストを受けた訳ではないが、本来なら冒険者ギルドがなんとかするべき仕事だ。街の悪霊屋敷の一つを浄化したことで、臨時の報酬が貰えるかもしけない」

ダクネスの言葉に頷く、そして俺とダクネス、めぐみんが散らかった屋敷内の後始末をし、カズマとアクアがギルドへの報告に行くことになった。

「なあコテツ」

「何だよダクネス」

掃除をしているとダクネスが話しかけてきた。

「いやなに、コテツはめぐみんをどう思っているのか気になつてな」

「おい、何だよどうつて・・・そりや・・・仲間だよ・・・」

ダクネスはニヤーつとして更に聞いてくる。

「ほう、本当にそれだけか？」

「何だよダクネス、 なすことよりさつさと手を動かせよ」

「・・・まあいい、 今度また聞かせてもらうからな！」

そう言つてダクネスは終身ニヤニヤしながら自分の作業に戻つて言つた。つたく、俺がめぐみんをどう思つてるつて決まつてるさ。

「そりや好きだよ」

でも、まだこの気持ちは伝えない。もう少しだけ今の関係を・・・

この起動要塞に終焉を！（上）

「何をやつているのですかコテツ!?」

「いや、確実に人のいないところにこれを飛ばすことができるのは俺だけみたいだからな」

「バカ！止めるコテツ！」

「じゃな皆・・・少しの間だつたけど、楽しかつたよ」

その日、俺は・・・

「ん？なんだこれ？」

俺は今ガーズ達とダンジョンに来ていた。

盗賊はダンジョン必須の職業だが、基本覚えるスキルが地味な事から人気のない職業だ。

幽霊屋敷の騒動があつてまだ1日しか経つていないので、元々ガーズ達とこのダンジョンに行くと約束していたので俺は今ここにいる。

「コテツどうかしたのか？」

「いや、何かのアイテム拾つただけだ・・・」

「おお！よかつたじやないか！んで、何かわかるか？」

「いや、わからん・・・後で鑑定しにいくてくるか」

「そうか・・・んでどうだ初めてのダンジョンは？」

俺は拾つたアイテムをポーチにしまいつつ、ガーズの質問に答える。

「思つてたより楽だな、罠も想定内だつたしな」

「ガハハハ！それはお前が盗賊だからだぞ！」

そんなことを話しながら俺達は帰る用意をする。

ちなみにだがガーズ達は今のこの季節でも、バリバリと仕事をしている。

ガーズのパーティーは腕利きとしてそこと有名だつたりする。本当ならアクセルのような初心者が集まる街ではなく、もつと危険な

場所で活動してもおかしくないぐらいのパーティーだ。

そんなガーズのパーティーにはダンジョン必須の盗賊がいない。

前はいたらしいが結婚してから危険な冒険者から足を洗い、冒険者時代の経験を生かして作ったアイテムを販売しているそうだ。

そこで、冬になつてから活動をあまりしなくなつてている俺にダンジョンに行くから付いてきてくれと頼まれたわけだ。

ガーズ達の戦い方はとても勉強になるし報酬もなかなか大きいので断る理由はなかつた。

「コテツこの後打ち上げするがお前も来るか？」

「お、いいねえ！・・・つて行きたいけど、今日はおとなしく帰るよ。家新しくなつたしな」

「そう言えばそだつたな」

世間話をしながらガーズ達が借りていた馬車にのりアクセスに向けて出発する。

「ふう・・・」

「おう、コテツ疲れたなら寝ていいぜ。ついたら起こしてやるよ」

「お？ そうか？ ならよろしく頼むよ」

実際、初めてダンジョンに行つていたから結構疲れているので甘えさせてもらおう。

『やつと見つけた・・・あの子に繋がる道・・・』

コテツ達がさつきまでいたダンジョンの隠されていた部屋に一人女性がいた。

『この500年待ちに待つたわよ・・・フフフ・・・ねあアナタ、やつと私達あの子に会えるんだわ・・・』

女性は部屋の中央にある既に白骨化した遺体をなでながら、続ける。

『準備はほんとできただわ・・・もう待つのはやめよ・・・』

女性はそういうながら水晶に映るコテツをみてニヤリと笑い

『私の新しい体までしっかりと届けてね・・・』

コテツはなにも知らない、自分が持ち帰った物が原因で自分のいや自分の大事な人の人生を狂わせることになることを・・・

『ああ！私の愛しい子・・・待つていて・・・』

アクセルに着いた俺はガーズ達に報酬を貰い、皆が待っているであろう屋敷に帰る途中の事だつた。

「コテツさん」

「お、リンかどうした？」

ギルドの新人受付嬢のリンが話しかけてきた。

「いえ、たまたま見かけたので話しかけただけですよ」

「そうか？」

フフフと笑いながら「そうですよ」と言うリンに苦笑しながら話す。

「送つていくよ」

「あれえ、もしかして口説いてますか？」

「・・・おし、俺行くからな」

「ああ！待つてください！冗談ですって！」

「はあ・・・」

「まあ、大丈夫なんですが、今から仕事ですし」

「そうなのか？」

「ええ何か急に呼び出されてですね。残念ですがまた今度お願ひします」

「わかつたよ」

「それじゃ私行きますんで！」

「おう、頑張れよ」

「はい！」

そう返事をしてギルドのほうに走つていくるリンを見送り俺は屋敷に向かつて歩き出した。

それにしても、この時間に呼び出しか……また何かあつたのだろうか……

「まあ大変なことならその内わかるだらうしいいか」

「ぶつ殺してやるつ!!」

「かかってこいやーー!!」

屋敷の前まで着いたが何だか中が騒がしい。

「はあ……まつたくこんな時間まで何をやつてるんだか……」

近くに他の家は無いと行つてももう深夜だ、こいつらはもうちよつと常識つていうものをだな……

「お前らー！こんな時間まで何やつて……」

「「「あつ」」」

怒鳴りながら入った俺を待っていたのはカズマからの全力パンチだつた。

「「「ごめんコテツ……わざとじやないんだ……」」

「……」

……わかつたよカズマ、お前がそういうつもりなら。

「ぶつ殺す」

「ひいっ!?」

「逃げんじやない！」

「いや、それは無理だあーーーーーーーー!!」

結局俺もカズマ達と夜遅くまで馬鹿騒ぎをしていた……

後で知つた話だが、こいつら俺のいないうちにダクネスが実家から持つてきた力ニと高級な酒を食つていたそうだ、もちろん俺の分など残つているわけがなかつた……

「ちくしょう……」

翌朝、俺は昨日暴れた後の掃除をしていた、少々派手に喧嘩してし

まい反省中だ。

「こつちは終わりましたよコテツ」

「お、ありがとう。悪いな手伝わせて」

「いえ、私も少ししてしまったので大丈夫ですよ」

「いや、それでもだよ・・・よし、終わり」

掃除を終えた俺はソファーアに座り、昨日の報酬を取り出して計算を始める。

屋敷を手に入れたとは言つても、まだまだこのパーティーには借金が有るのだ、今回はギルドからの報酬ではなくガーズ達からの報酬なのでいつものように借金の返済分が引かれないのだ。

そのため、計算して返済分とパーティーの備蓄分、それから俺の取り分にわけている。

最近決まったことなのだから個人的に来た依頼の報酬は各自で計算をし返済、備蓄、個人の取り分に分けることになつていて。

まあ、個人で来る依頼は俺にしか今のところ来ていないので俺しかやつていないので・・・

「コテツ、そこ間違っていますよ」

「ん?どこだ?」

「ここですよ、これだつたら備蓄のどこが多くなります」

「おお、本当ありがとうございます」

最近はこのようにめぐみんが手伝いをしてくれるようになつた。
計算を間違つて慌てていた時に教えてくれたことがきつかけだつた、今は毎回のよう手伝つてくれるのだが、嬉しい反面ちよつとだけ恥ずかしくもある。

「・・・なあ、めぐm・・・」

『デストロイヤー警報! デストロイヤー警報! 現在、起動要塞デストロイヤーがこの街へ接近中です! 冒険者の皆様は装備を整え、冒険者ギルドへ! そして、街の住民の皆様は直ちに避難してくださいーーいつ!!!』

・・・またかよ!

『起動要塞デストロイヤー』について今もつてている情報は少ない、わかつてているのはそれが通つた後はアクシズ教徒以外何も残らないと言われている事だけだ。

「・・・なあめぐみん、何で荷物纏めてるんだ？」

デストロイヤー接近の警報がなつたとたんにめぐみんは慌てて荷物をまとめ、二階にいたアクアが騒ぎ出した。

そのことに少し疑問に思つた俺はめぐみんに聞いてみたのだが…「逃げるに決まってるじやないですか」

「決まつてるのかよ・・・」

「ええ、あれに勝てるわけ無いですからね」

「まあ・・・そ、うだよなあ・・・」

そう言いながら装備を整え始めた俺を見て、めぐみんは目を見開いて驚いた。

「コテツ、まさかデストロイヤーと戦う気ですか!?」

「まあな」

「どうして・・・」

「・・・俺にはこの街以外、居場所が無いからな・・・」

よし、準備完了、デストロイヤーを実際に見たことはないからどんなものかわからない、だが魔王の幹部だったベルディアよりもヤバいだろう。

・・・さてと、行くかな。

「待つてください」

俺がギルドに向かおうとする俺をめぐみんは呼び止める。

「・・・私も行きますよ。コテツだけじゃ心配ですかね」

めぐみんはそう言うと纏めていた荷物から杖を取り出し、俺の後をついてくる。

「・・・行くか」

「はい」

俺達はギルドに向けて屋敷を飛び出した・・・何か忘れてる気もあるが・・・

「逃げるの！遠くに逃げるのよ！……あれ？皆は……？」

この起動要塞に終焉を！（中）

『何で乗り移れないのよー！！』

あるダンジョン内の隠し部屋で女性が叫んでいた。

『ああもう！なんですよ！何でこんな強力な結界張つてあるの!?リツチーの私でも解けないなんてどんな奴が張つたのよ!?』

自称リツチーの女性は地団太を踏みながら叫び、

『もういい！今日は寝る！』

白骨化した遺体の横に寝転がり、骸骨に頬ずりをしながら眠りについた・・・

冒険者ギルドには既に冒険者が集まりだしていた。

その中にはガーディアンや魔剣の自称勇者のミツルギの姿もある、皆重装備なので動きやすさ重視の俺は少し浮いて見える。

俺の装備はラドお手製の軽い布の防具にポーチとホルスターを隠す腰巻、そして低い防御力を補うための特殊な鉱石を使用した、魔力タンクにもなる特注の籠手だ。

「コテツとめぐみん！先に来てたのか！」

「おう、カズマ来ると思つてたよ」

「当たり前だろ、この街には世話をなつてゐるんだからな」「だよな！・・・つと来た見たいだぞ」

冒険者が集まつたところでギルド職員が大声で言つた。

「お集まりの皆さん！本日は、緊急の呼び出しに応えて下さり大変ありがとうございます！只今より、対起動要塞デストロイヤー討伐緊急クエストを行います。このクエストはレベルも職業も関係なく、全員参加でお願いします。無理と判断された場合はこの街を捨て、全員で逃げる事になります。皆さんがこの街の最後の砦です。どうか、よろしくお願ひします！」

それから職員がテーブルをギルド中央に集め、会議場のようなものを作った。

「それでは作戦会議を始めます。まずは現在の状況を説明させてもらいます！放送でもお伝えした通り、この街には現在起動要塞デストロイヤーが接近してます、街バリケードを作つてもらつている人以外の街の住人は、元冒険者で聖騎士だつたラドさんを筆頭に元冒険者の方が護衛をし、安全な場所に避難してもらつています・・・さて皆さんの中にデストロイヤーの説明が必要な方はいますか？」

俺を含め何人かの冒険者が手を上げる。

職員は軽く頷き、デストロイヤーについて説明し始めた。

「起動要塞デストロイヤーは、対魔王軍兵器として魔道技術大国ノイズで建造された、超大型ゴーレムです。蜘蛛のような外見で、特筆すべきは小さな城ほどの巨体でありながら八本の足で馬を越える速度をだすこと、八本の足で踏まれてもしたら大型モンスターでも挽肉にされます。体には常に強力な魔力結界が張られており、まず魔法攻撃は意味をなしません」

無謀、ここまで説明を聞いただけでそう思つてしまふ。

この世界で一番強力な攻撃方法は魔法による攻撃だ、その魔法が効かないデストロイヤーは魔王軍ですら気安く手を出せないみたいだ。

物理攻撃をするにしても下手に近づけば挽肉にされる・・・

「デストロイヤーに攻撃するには、弓や投石によるものになるわけですが・・・魔法金属製のゴーレムな為、弓はまず弾かれ、攻城用の投石器も、起動要塞の速度からして、運用が難しい思われます。それと、空からのモンスターの攻撃に備える為、中型のゴーレムが備え付けの小型バリスタで飛来する物を打ち落とし、なおかつ戦闘用ゴーレムが胴体部分の上に配備されています。あと、なぜデストロイヤーが暴れているのか、ですが・・・。研究開発を担つた責任者が、この起動要塞を乗つ取つたと言わわれています。そして、現在も起動要塞の中核にその研究員がいて、ゴーレムに指示を出していふと言われています」

魔法は効かない、近づき過ぎたら挽肉になり、弓矢は弾かれ、移動速度も速く、空からの攻撃にも万全の対策がされている・・・

「現在、起動要塞『デストロイヤー』は街の北西方向からこの街に向けて進行中です……それでは、意見をどうぞ！」

会議は難航した、直ぐに思いつくような作戦は既に試されており、全てが悉く失敗に終わっているらしい。

「コテツ、お前の武器ででどうにかできないのか？」

そうカズマから訊かれ、周りの冒険者から注目を浴びる。

「そうか、アイツの使つている武器なら……」

「魔王の幹部にも効果があつたんだ！ アイツならなんとか……」

そんな呟きが聞こえる。

「それで、どうなんだ？」

「……難しいな、まず銃弾は弾かれると考えたら、やつぱり爆発系の武器になるけど、爆裂魔法並みの火力はまず出ないし、決定打にはかける……まあ、無茶すれば弾丸系にはなるけど貫通力が高いのできるけど……」

「無茶つてどのくらいだ？」

「今の俺だと何も無いどこから創るのに最低でも爆裂魔法3発分の魔力がいる」

「……おいおい爆裂魔法3発分つてどんだけだよ」

「めぐみんが3人いるつて考えればいいだろ」

「……それ嫌だな」

「コテツ、カズマ、聞こえてますよ」

めぐみんに杖を突きつけられカズマが慌てて話をそらす。

「そ、そうだ、アクアお前ならその魔力結界つてのなんとかできないか？」

？

「やつてみないとわかんないわよ？ 結界を破れる確約はできないわ」

「破れるんですか？『デストロイヤー』の結界を！」

話を聞いていたギルド職員が大声を上げた。

「い、いや、もしかしたらつて事で。確約はできなううです」

カズマの言つた言葉にギルド内がざわつく。

「一応やるだけやつて貰えまっせんか？それができれば魔法による攻撃が……！」いや、駆け出しの多いこの街の魔法使いでは、火力が足りないでしようか……」

職員が再び悩みだし、場が静まり返る中。

ふと、ある冒険者が呟いた。

「火力もちならいるじやないか、頭のおかしいのが」

「そうか！おかしいのがいたな！」

「おい待て、それが私のことを言っているなら、その略し方は止めてもらおう。さもなくば私の頭がいかにおかしいかをここで証明することなる」

勢いで立つてしまつたが、皆からの期待の眼差しを受けためぐみんは、顔を赤くし、

「わ、我が爆裂魔法でも、流石に一撃では仕留めきれないと……お、おもわれ……」

そろそろそ言い座つた。

せめてあと一人、強力な魔法使いがいれば……

この場にいる皆がそう思つてゐるだろう、そんな時だつた。

突然、入り口が開けられた。

全員の視線を受けたその人はフツと笑い、こう言つた。

「我が名はちよいざぶろー！紅魔族随一の冒険者にして雷魔法を愛するもの……！」

・・・誰だこのおかしいの

「ハハハ！道具屋の貧乏店主かと思つた!? 残念！ちよいざぶろーでした！」

う、うぜえ……何だこの男は……

紅魔族つて言つてたが……

「お困りのようですね！火力が必要ならこの俺が助太刀しよう！なに、爆裂魔法なんてネタ魔法は使えないが、そこそこの火力ならだせるさ！」

「お、お願ひします！」

「フフフ……我に任せておけ。……それにしても……さつきの我

ながらカツコよかつたなあ・・・」

冒険者が「こいつ大丈夫か?」つと思つてゐるだらう、俺も思つたし隣にいるカズマもまた変なのが来たつと呟いてゐる。

「ん?」

ちよいざぶろーと名乗つた男がこちらを・・・正確に言えばめぐみんを見て言つた。

「めぐみん! めぐみんじやないか! 久しぶりだな!」

「ちよいざぶろー久しぶりですね」

「めぐみん、こいつのこと知つてるのか?」

「ええ、ちよいざぶろーは私の・・・幼馴染ですから」

「マジかよ!」

「こいつが・・・めぐみんの幼馴染か・・・」

「どうした?俺の顔に何かついてるか?」

ちよいざぶろーは深く被つた帽子を少し上げ、紅魔族特有の紅い目でこちらを見てくる。

「い、いや、なんでもない・・・」

「そうか?まあいい。火力の方は問題ないだらう、さつきウイズさんがこつちに向かつてゐる見たし・・・それよりも破壊しそこなつた時の事を話そうじゃないか」

いきなり来て、仕切りだすちよいざぶろーだが、言つてゐることは正しい。

こうして、遅れてきた紅魔族のちよいざぶろーと、このあと直ぐにやつて來た道具屋の店主でリッチーのウイズを加えて、『起動要塞デストロイヤー』討伐作戦の内容が決まった。

この起動要塞に終焉を！（下）

「おい、あんた」

「ん？」

デストロイイヤー討伐の作戦内容が決まり、デストロイイヤーを迎え撃つ予定の平野で罠を仕掛けている時に、とんがり帽子を目元が隠れるまで深く被った紅魔族の少年、ちよいざぶろーが話しかけてきた。

「どうしたんだ？」

「・・・ふうーん、なるほどねえ～」

「・・・おい、いきなり何なんだよ！」

「いや～別にく」

さつきも思つたが何なんだこいつは！

「俺も準備するかな」つと言ひながら何処か行こうとするちよいざぶろーは最後に

「・・・まああつちでもようしくなあ～」

「？」

あつちつてなんだよ・・・

「でけえ！それに速え！予想外に怖え!!」

「来たぞ！全員頭を低く！踏みつぶされないように、絶対にデストロイイヤーの前にはでるんじゃないぞ！」

冒険者の檄が飛び、デストロイイヤーの討伐が開始された。

だが、デストロイイヤーのその巨体に冒険者達がパニックを起こしかけていた。

デストロイイヤーはもの凄い勢いでアクセルへと突き進む・・・よし！予想通りのルートだ！

デストロイイヤーが赤い線で印を付けた場所に入つた瞬間、デストロイイヤーの足元から轟音がなつた。

「対戦車地雷だ！これなら少しは削れるだ・・・チクショーゼンゼンクラツテネー」

戦車ですら一時的に動けなくなる対戦車地雷を何発も受けながら

も、気にした様子すら見せずに突っ走るデストロイヤーを双眼鏡越しに見て軽く挫けそうになる。

「てか、お前大丈夫なのか？生半可な魔法じゃ効かないと思うんだが……」

「……何故俺が足止め何ぞをしなきや行けないんだ」

俺は隣にいるちよいざぶろーに話し掛けるが返事がない。

こいつと俺の役目はデストロイヤーの足止めだ。

あの後來たウイズが爆裂魔法を使える事がわかり、ギルド職員の指示で、アクアが結界を破り、ちよいざぶろーが爆裂魔法の命中しやすくなるように足止め、めぐみんとウイズが爆裂魔法で足を破壊する事になった。

だが、ちよいざぶろーは自分の役割に不満が有るらしい……まあ、あれだけ言つて足止め係りになつたのだから同情する。

「ええい、王都のギルドなら間違いない俺が抜擢されるのだが、流石初心者集まる街のギルド……」

「くだくだ言つてないで準備しろ！もうそろそろだぞ！」

『セイクリッド・スペルブレイク』ツ！

俺がちよいざぶろーに怒鳴るとほぼ同時にアクアの手から白い光の玉が撃ち出された。

それはデストロイヤーに張られた薄い膜のような物が張られ抵抗したが、ガラスの割れるように、粉々に弾けた。

「おいいいい!! 次お前の番だぞおおおお!! ささとやれえええええ!!」

「うるさい、あわてるな詠唱は終わつている」

結界が破られたにも関わらず動かないちよいざぶろーに怒鳴るが心底ウザそうな顔をして、紅い宝石のついた杖を取り出す。

「さあ、沈め『ハイグラビティ』

ちよいざぶろーが魔法を唱えた瞬間、爆音が鳴り響いた。

「「「……爆裂魔法必要ねえええ!!」」

ここにいた冒険者全員が叫んだ。

対戦車地雷ですら止まらなかつた起動要塞デストロイヤーがちよいざぶろーの魔法一つで地面に叩きつけられたのだ。

デストロイマーの回りは大きく陥没しており、デストロイマーは潰れたクモのような姿になっていた。

「くああ……ん? 何やつてるんだ? 速く足破壊しろよ。効果は何時までも続かないぞ?」

呑気に欠伸をしながら、そう言ううちよいざぶろーが言うようにデストロイマーは少しづつだが、足を動かし始めていた。

『お、おう! ウィズ頼む! そちらの側の脚を吹き飛ばしてくれ! おい、めぐみん! お前の爆裂魔法への愛は本物なのか? いつも爆裂爆裂言っているお前が負けたらみつともないぞ? お前の爆裂魔法はあれも壊せないへなちょこ魔法か? ……てか、よいざぶろーに任せてよくね?』

「な、なにおうつ!? 我が名をコケにするよりも一番言つてはならない事を……あれ?」

不意に辺りが暗くなり、空が曇り始めた。

『雷光よ、雨のごとく降り注げ』

ふと隣をみるとめぐみんが爆裂魔法を使う時のような雰囲気も纏つたちよいざぶろーがいた。

『全てを破壊し、蹂躪し、最強と言う物を見せつけろ!』

ちよいざぶろーが一言言葉を発する度に膨れ上がる魔力。

そして、その姿を見たウィズが驚きの声を上げる。

「ふ、複合魔法!?

『ライトニング・レイン』

デストロイマーの片足に閃光が降り注いだ。

強烈な光とわずかに遅れてやつっていく轟音。

一発だけではない、何発も何発も同じ場所に落ちる。

デストロイマーの脚は最初の数発は耐えていたが、落雷の回数が増える事にその脚を赤くしていき、約20発目の落雷でとうとう砕け散った。

「フハハハハハ!! 見たか!! これぞ我が雷魔法の極地!! 複合魔法で他属性の物とあえて混ぜず、一撃の威力が重いライトニングと、複数回落ちるサンダーレインを複合した魔法!! 威力と攻撃回数、そして何よ

りこの派手さ!!これこそ魔法の到達点だ!!!!・・・まあ、威力と使い勝手は得意の炎系の方が断然上だけど・・・」

『この機体は、起動を停止致しました。この機体は、機動を停止致しました。排熱、及び機動エネルギーの消費ができなくなっています。搭乗員は速やかにこの機体から離れ、避難してください。この機体は・・・』

「乗り込めー!!」

今にも爆発しそうなデストロイヤーに次々と冒険者たちが乗り込んでいく。

めぐみんより先に、魔法で片方の脚を破壊したちよいざぶろーは満足気な表情で休んでいる。

そしてもう片方の脚もウイズの爆裂魔法で破壊され、デストロイヤーは完全に動けなくなつたのは良かつたが、場所が街に近すぎた。このままデストロイヤーが爆発すれば少なからず街に被害ができるだろう、それを防ぐため冒険者達は突き進む。

「どうするんだよこれ!?

「どうしようか・・・」

ここはデストロイヤーの動力室、そしてこの機体の動力源になつていた、鉱石コロナタイトがあつた。

永遠に燃え続けると言われるその鉱石は、エネルギーの消費ができないくなつており、直ぐにでもボン!つとなりそうだった。

だが、この今場所にこの鉱石を何の問題も無く処理できる者がいなかつた。

「本当にヤバい!コテツどうしよう!」

「うるせえ!だいたいカズマが何も考えずにステイールでこれ抜き出す方が悪いんだろうが!」

「何だと!コテツがステイールでとれるんじゃね?つとか言い出したからやつだけだろ!」

「本当にやる馬鹿だとは思つて無かつたんだよ！この馬鹿！」

「喧嘩してる場合ですかふたりとも！」

今ここにいるのは冒険者のカズマ、盗賊の俺、爆裂魔法しか使えないめぐみん、そしてあまり使えない自称女神のアクアだ。

「アクア！これできるだけ冷やして時間かせいでくれ！」

ちなみにウイズはちよいざぶろーに連れられてどこかに行つた。

「まあ、任せなさいな！」

俺は「アグ」アリモテアリモテ、頼みながら壁に手をつく

「いや、なに。こうするんだ!」

貴様新に仕い人半、此の品目精算

精製する武器をイメリジし終わつた余端壁が姿を変え始めた。

これ1から物体を創らなくてもいい分魔力の消費が少ないので、精製した武器の質は素材にした物の質によつて変化するので、質の悪い物で創つたら最悪持つただけでも壊れる物ができるだろう。

そして、このアリゾナは俺以外の人間でも使用できる場所だ。

だ
ろ
う。

「投石機か！わかつた！」

アクアができる限り冷やしていたコロナタイトを受け取り火傷しながらもセットしようとしたときだつた。

アクアがそう言いながら投石機に寄りかかたのだ、発射のスイッチを押しながら・・・

「ブツ!?

デストロイヤーの内部に残っていたエネルギーを使用して打ち出したため、勢いはハンパない。

そして、こうしている間にもコロナライトはその輝きを増して行っている。

「も、燃えるううう!!!腕が燃えるううう!!!」

クソ！どうせこんな事になるなら！」

「何をやっているのですかコテツ!?」

「いや、確実に人のいないところにこれを飛ばすことができるのは俺だけみたいだからな」

「バカ！止めろコテツ！」

「じゃな皆・・・少しの間だつたけど、楽しかつたよ」

その日、俺は・・・

「つとか胸アツな事してからが良かつたああ!!!」

手の中にあるコロナライトの輝きは赤いを通り越して白い光を放つて いる。

「ちくしょー!!ぶつ飛ベ!!」

俺は落下し始めると同時にコロナライトを上に投げた。

そして・・・光と爆音が世界を包んだ。

「いつ？」

不意に目が覚めた、あの爆発で生きていたこと、そして、あの高さから落ちて無事だったことに我ながら驚いた。

そして、もう一つ・・・

「（）・・・（）だよ・・・」

俺は薄暗い洞窟の中にいた・・・

この迷子に・・・

コテツが空に吹き飛んで行く様子を見て、ちょいざぶろーは笑う。「フハハ・・・計画道理だな、これで異界へ行く為のお膳立ては終了。クリスにかなり怒られそうだが・・・そこはしようがないと割り切るか・・・さて、そこで見ている雑魚なリツチー、アイツの体諦めるならあんたの子供の所に連れて行つてもいいぞ」

ちょいざぶろーが何も無い場所にそう言うと、突然それは現れた。この世界では特別な意味を持つ、黒い髪に紅い目、出るところは出て、ひつこむところはひつこんでいる体。

腰まで届きそうな髪をなびかせて、彼女は現れた。

「・・・いつから気づいていた」

「最初から」

間に即答するちょいざぶろーは続ける。

「この街のギルドもあんたも、リサーチが足らねえよ。俺知らねえとかね」

「・・・あんた何者?」

「何者って見た通り、普通の紅魔族に決まってるじゃないか」

そう言うちちょいざぶろーを見て女性は声を低くし、言う。

「普通ですか？普通の紅魔族が難攻不落指定ダンジョン攻略数5つ、王国軍が討伐を失敗したドラゴンなどの超危険なモンスターを討伐17体、それを全てたつた1人で行つたあなたがただの紅魔族ですか？」

「それでも僕は！ただの紅魔族です！」

「嘘をつくな！」

そう怒鳴るリツチーの女性を見て「はあー」とため息をつき、ちょいざぶろーは言う。

「そんな事より、めぐみんの体狙つてたようだけどそれを諦めるなら、お前が向こうに行くのを手伝つてもいいぜ？」

「・・・無理よ。異世界に渡るには丈夫な実体がいる、だから私はあの

紅魔族の体を狙つたのよ」

「そりや、人が使う前提で造られているあの神器を使うなら、体は必要だつたろうな。あれは体と言う器を先に飛ばし、座標を安定させ、魂が体に引き寄せられる性質を使い異世界に渡る物。魂に相当な負担がかかるからな。リツチーじや下手すりや消えるな」

「だが」つと続け、ちよいざぶろーは紅い瞳をリツチーの女性に向け、言う。

「神器を使って消えるなら、神器を使わなければいい。それこそ、紅魔族の得意な魔法を使ってな」

「魔法ですか？」

「そ、魔法だよ……もつとも、冒険者カードみたいな便利な物が無かつた時の奴だけどな」

そう言い、ニヤリと笑うちよいざぶろーにリツチーの女性は聞く、『何故、自分を手伝うのか』つとそれにちよいざぶろーは帽子で目元を隠し、答える。

「俺は好きだからさ……紅魔族がね」

そう言いながら、こちらに向かってくる白髪の盗賊の女の子から逃げるよう、その場から離れていった。

「よし、把握。ここアクセル近くじゃ無いな」

それどころか、あの国ですらない可能性が出てきた。

それは、ちよつと前のことだが、このダンジョンだと思わしき所を攻略に来たと思う冒険者パーティーが通つたのだが……

「お、すいません！」

「――。――、――。」

「・・・なに言つてんだこいつ？」

言葉が・・・通じなかつたのだ。

更に不幸な事に、どうにか意志疎通をはからうとするも、冒険者達の後ろにモンスターがいて、今にも襲いかかつて来そうだつたので、ハッシュュパピーで撃ち落としたら、俺が突然襲つて來たと勘違いし、

武器を抜き、飛びかかってきたのだ。

動きを見るからに駆け出し・・・それもレベル10あるればいいかな？つ程度だつた。

相手の振つてきた剣を籠手で受け止め、そのまま左腕で片腕を掴み、懷に入りつて、右手で相手の頭を掴んだ、そして・・・

「ジジイ直伝！CQC！」

思わずそう叫びながら地面に冒険者を叩きつけてしまつた・・・

俺のlevelは最近31になり、たまに両手剣を使うようになつたからか、筋力値ソードマンになれるほどが高くなつてゐる。

しかも、俺が習得しているスキルは殆どが対人系のスキルで、その中には勿論、素手での攻撃力を上げるスキルや、相手を氣絶させやすくなるスキルなど持つてゐる。

その筋力値で地面に叩きつけられた、冒険者は派手な音を立て、地面と激突し、気を失つた・・・

それを見ていた他の冒険者は顔を青くし、我先にと逃げていく。

「ふう・・・よし・・・つてよしつじやねえええ！！」

因みにそう言いながら頭を抱えていた俺の隙を見て、気を失つた冒険者も連れて行つているのが俺にとつては絶望的だつた。

「ど、どうしよう・・・せつかく街に行くチャンスが・・・」

まさかダンジョンの上に街があるわけないし、もしここから出されたとしても、街の方向がわからなかつたら意味がない。

だが、ここは見たかぎり、人がよく通つてゐるみたいだ。

本当に街から近い場所に有るのだろう、モンスターもでるが、それは『潜伏』スキルでどうにでもできるし、食料は・・・まあ、ある。初級魔法は覚えているので水分にも困らない、いざとなつたらモンスター狩つてから食えば良いだろう。

「さて、そうと決まれば罠を張るかな」

俺は周りを見渡し、ちようど良い岩場を見つけてその周りにお手製の罠と、クレイモアを設置し寝床にする岩場の陰にポーチから薄暗いこの場所では見難い、藍色の布を取り出し、被せ設置した罠とまとめで『隠蔽』スキルを使い、『潜伏』スキルを使いながら横になり、少し

休むことにした。

「大量にアンデットモンスターが出てこないことを祈ろう・・・ふあ・・・」

そうして俺は少し睡ることにした。

「カズマ、めぐみんの様子はどうだ?」

「今は泣き疲れて寝てるよ・・・」

「しようがないさ。あんな事が合つたんだからな・・・」

コテツがコロナタイトを持ったまま、空に打ち上げられて、1日すぎた。

生存は絶望的で、ギルドはデストロイヤー討伐が犠牲者がたつた1人ですんだことは奇跡的だといい、明日、正式に死者1名で王都のギルドに報告するそうだ。

流石にコテツが前、遭難した時に搜索を手伝ってくれたガーズ達やらドも、今回はもう生きていらないだろうと言つて搜索は俺達だけで行つたが、死体どころか体の破片すら見つけられなかつた。

「アクアの方はどうなんだ?」

「アクアはアクアでキツそうだ、浴びるほど酒を飲んでいる」

「いつものこと・・・つと言いたいが、あれみたらそれも違うってわかるからな・・・」

冒険者は危険な仕事だ、怪我は毎日のようにするし、死にそうな目にもあう。

だが、どこかで俺や仲間達は死ぬ事なんて無いつと思つていた・・・あ、俺はこの世界に来てからも何回か死んでるか。
死ぬはずがない。

それは間違いだつたと今思い知らされていた。

確かに、まだコテツが生きている可能性はある。があの爆発の中を生き残り、そして、あの高さから落ちて生きていられるのだろうか?
例え生きていても、酷い状態なのは確かな事だろう。

そして、俺達は覚悟が足りなかつた『いつ死んでもおかしくない』そんな事はわかつてゐるつもりだつた。

だが、結局はわかつていなかつた。

コテツが死に、それがよくわかつた、わかつてしまつた。

「・・・何で死んだんだよ・・・コテツ・・・！」

言つてもしようがない・・・だからせめて、アイツのためにやれることをしよう。

例えば・・・葬式とか？

そうだ、葬式をしよう、この世界のものではなく、日本の葬式を・・・

死んでもいなゐのに葬式を開かれそうになつてゐるコテツの前に、狼人が近づいていた。

それは確かに特別と言える3人の出会いの始まり。

1人は『神』から力を与えられ、共に魔王の討伐を目指す者。

1人は数々の『神』が多く眷族を従え、争う中でたつた1人で戦つてきた者。

その2人が出会おうとしていた。

そして・・・

「あ、マジで。もう送つちまつたぞ？」

「君は何をやつているんだ！」

残る1人がやらかした事で、割と洒落にならない事態になつてゐる

ことはまだ、誰も知らなかつた・・・

この紅魔族の目的を

ここは元難攻不落指定のダンジョン『叡智の塔』近くに多くのドランゴンが生息している谷があり、その中には特別指定モンスターである『アジ・ダカーハ』を始め極めて危険なモンスターの生息している。

そんな危険な場所の近くにあるこのダンジョンはその性質からこう呼ばれている。

『生ゴミの叡智』

人々このダンジョンは大昔の賢者が建てたと言われており、地上の五階からなる書庫には失われた魔法や聖剣や魔剣の生成方法など現在誰も使えない・・・いや、世界で一人しか使えない知識納められている・・・がこの書庫に入るには一部例外を除き地下のダンジョンを攻略しなければならないが、そこは攻略されたと言つても元難攻不落指定ダンジョン、並みの冒険者はまずこのダンジョンに挑む前にドランゴンとの遭遇を恐れ近づかず、一流の冒険者も馬鹿みたいなモンスターの配置、卑劣なトラップなどで諦め、途中で引き返す事が多かつた。

『ダンジョン攻略が厳しいなら、壁に穴あければいいんじやね?』

そう考えた者がいたが結果は失敗、爆裂魔法を塔に打ち込んだ瞬間、塔の魔力結界で威力は削がれ、傷ついた壁も一瞬で再生した。

そして、その結果に唖然としている爆裂魔法使用者の頭上に大量の生ゴミが降り注いだのだ、絶妙に腐り変な汁がしたたり落ちている最高に臭い物が・・・

そう、このダンジョン外からの攻撃に対して反撃するのである。

地下のダンジョンに生息するモンスターから魔力を少しずつ奪い、転移魔法の応用で世界中からかき集めてきた生ゴミを襲撃者の頭上へ転移させ、そのまま落とす。

たまにいい感じに腐ったゾンビも生ゴミと判断され転移していくのだからたちが悪い。

その塔全体が生ゴミ転移装置である事から『生ゴミの叡智』つと呼

ばれるようになつた。

そんなダンジョンをソロで攻略した人物こそ、自室に改造した五階の一室で正座をさせられている紅魔族の少年、ちょいざぶろーである。

「すいません、もうしません、だからゆるしてー」

「棒読みじやないか！ ちょいざぶろー、君本当に反省してるのかい！？」

「いや、全然」

「そうだよね！ みてわかるよこんちくしよう！」

呆れる白髪の少女・・・クリスはちょいざぶろーよ全く反省していない様子を見て、ため息をつきながら続ける。

「はあ・・・今回君がしたこともう一度言つてみてよ」

「めぐみんの体狙つてた元同族のリツチーからめぐみん守るため、めぐみんの近くにいたリツチーの計画の要の男をリツチーの行きたかつた異世界に男の持つてた神器をわざと発動させ飛ばし、体乗つ取る手段無くしたリツチーに元同族のよしみで異世界に飛ばしました。あと、あつちの世界に俺の欲しい神器見つけたので取りに行く予定です」

「帰る手段は？」

「考え中」

「コテツが帰つて来れる保証は？」

「無い」

「死ぬ可能性は？」

「めちゃくちゃ高い」

「帰つて来れなかつたら？」

「大爆笑」

「馬鹿じやないの！」

あまりの計画性の無さに嘆くクリスを宥めながら、ちょいざぶろーは言う。

「まあまあ、クリス。そんな怒るなよ、だからいつになつてもそんな胸なんだよ」

「それなら僕の胸が小さいのは全部ちょいざぶろーのせいなんだね」

「知らんがな」

ちよいざぶろーは立ち上がり、机に置いてあつた本をクリスに渡しながら続ける。

「とりあえず、これ読んで頑張れ」「ん？」

クリスはちよいざぶろーから受け取った本の題名をみて固まる。

『胸を大きくしよう！5／紐でわかる格差社会』

「ねえねえ！今どんな気持ち？今どんな気持ち？」

「君に生まれたどこを後悔させてやりたい・・・」

「下着盗られた君にできるならやつてみ」

「ぐぬぬ・・・」

煽るちよいざぶろーとキレる寸前のクリス。

これはちよいざぶろーとクリスが出会った頃から変わらない関係だつたりする。

そんな一触即発の空気の中、ちよいざぶろーの部屋の隅の小さな窓から小さなドラゴンが入ってきた。

「キュー」

そのドラゴンは鳴きながらちよいざぶろーの頭の上を一回りし、そのままちよいざぶろーの肩にとまつた。

「ん、ラナ戻ったか」

「キュー！」

ラナと呼ばれた小さなドラゴンはちよいざぶろーに数回頬ずりをした後、咥えていた鱗の欠片をちよいざぶろーに渡し部屋の隅にある自分の巣に行き羽を休める。

このドラゴンはちよいざぶろーとクリスが一時期、共に行動していた時に偶々拾つた卵から孵つたハンドスケールドラゴンで2人によくなつていている。

ちなみにラナつという名前は当然ながらクリスがつけた、ちよいざぶろーがつけていたら『ラナ』ではなく『しそうきち』になつていた。「それは？」

クリスはちよいざぶろーに手のひらに有る鱗の欠片を見ながら

きく。

「真竜の鱗の破片」

「え？・・・ええ！」

「他の異世界に正確に転移する場合、目印となる物が必要だ。あのめぐみんの仲間の時は神器に設定された世界に飛ばすだけだから別に必要は無かつたが、こちらに戻つてくる時はそうには行かない。神器、もしくはそれに匹敵するほどの物を媒体にゲートを作り上げる。」「魔力はどうするの？」

「この塔を使う」

ちよいざぶろーは壁を叩きながら言う。

「この壁の模様は地下のダンジョンに生息しているモンスターから魔力を奪い、天井の魔法陣に魔力を送り魔法を発動させる機能があるみたいだ。そこに細工をして隣の部屋に作つた魔法陣にも魔力を送れるようにした。多少地下のモンスターが弱るが特に問題は無い、危険だけ高く旨味がこの書庫への入出、及び本の観覧だけのここに冒険者はまず来ないだろうし、来たとしても2階層で逃げるだろうさ・・・これで今できるここに帰つてくる為の準備は終了。実験なんてできないから帰つて来れるかは実際にしないとわからないが・・・」「それはわかつたけど・・・」

ちよいざぶろーの言葉を頷きながら聞いていたクリスは頭に青筋を浮かべながら手に持つた短剣をちよいざぶろーの頭に少し押し込みながら言う。

「ラナが何で真竜の鱗持つてきたかそろそろ言おうか！」

「ままま、待て！待てクリス！いやクリスさん！刺さつて！短剣刺さつてるよ！このままだとちよいざぶろーさん逝つてしまうよ！？斬新なオブジエになっちゃうよ！？」

「大丈夫さ！誰も気にしないからね！」

「気にするよ！俺超気にするよ！」

「あ、なら問題ないね」

「あるよ！超あるよ！わかつたから胸の事でいじつて悪かつたから！…あれ？クリスさん？…痛い！痛い！話す！話すから!!や、やめ…アーケー!!」

「変な声出さないでくれるかな！」

「じゃ、刺すの止める」

「…わかつた」

クリスが短剣をしまうとちよいざぶろーは続きを話し始めた。
「まず、この鱗だが。別に真竜の巣に直接取りに行かせた訳じゃないよ。これは俺とラナの半年にも及ぶ暇つぶしの成果だ」

「…一応聞いておくよ、何してたの？」

「いや、殺し合いに…」

「馬鹿だね」

『断言された!?』つと叫ぶちよいざぶろーを見て呆れながらクリスは言う。

「それでどうなつたの？」

「えっとね…死にかけた」

「それはわかるよ」

「おけ、わかりやすく言うとだな。真竜寝てる、魔法撃てるだけ撃つ、真竜起きる、襲われる、仲良くなるだ」

「意味わかんないよ…」

「わからんでいいさ、それより俺は向こうに行くよ。ちと洒落にならん神器有るらしいからね、俺はまだ大丈夫だが、あのリツチーが万が一触れたりしたらあつちの世界マジでヤバいな…ぶつちやけどうでもいいが…」

「おい！」

「いや、ちゃんとやることはやるよ。もしかしたらあの世界にいるかもしれないからな」

「…誰が？」

「昔また合おうと約束した奴ら」

寂しそうにそして懐かしそうにそう言つたちよいざぶろーは身を翻し、装備を整え始めた…何時かの約束を果たすために…